

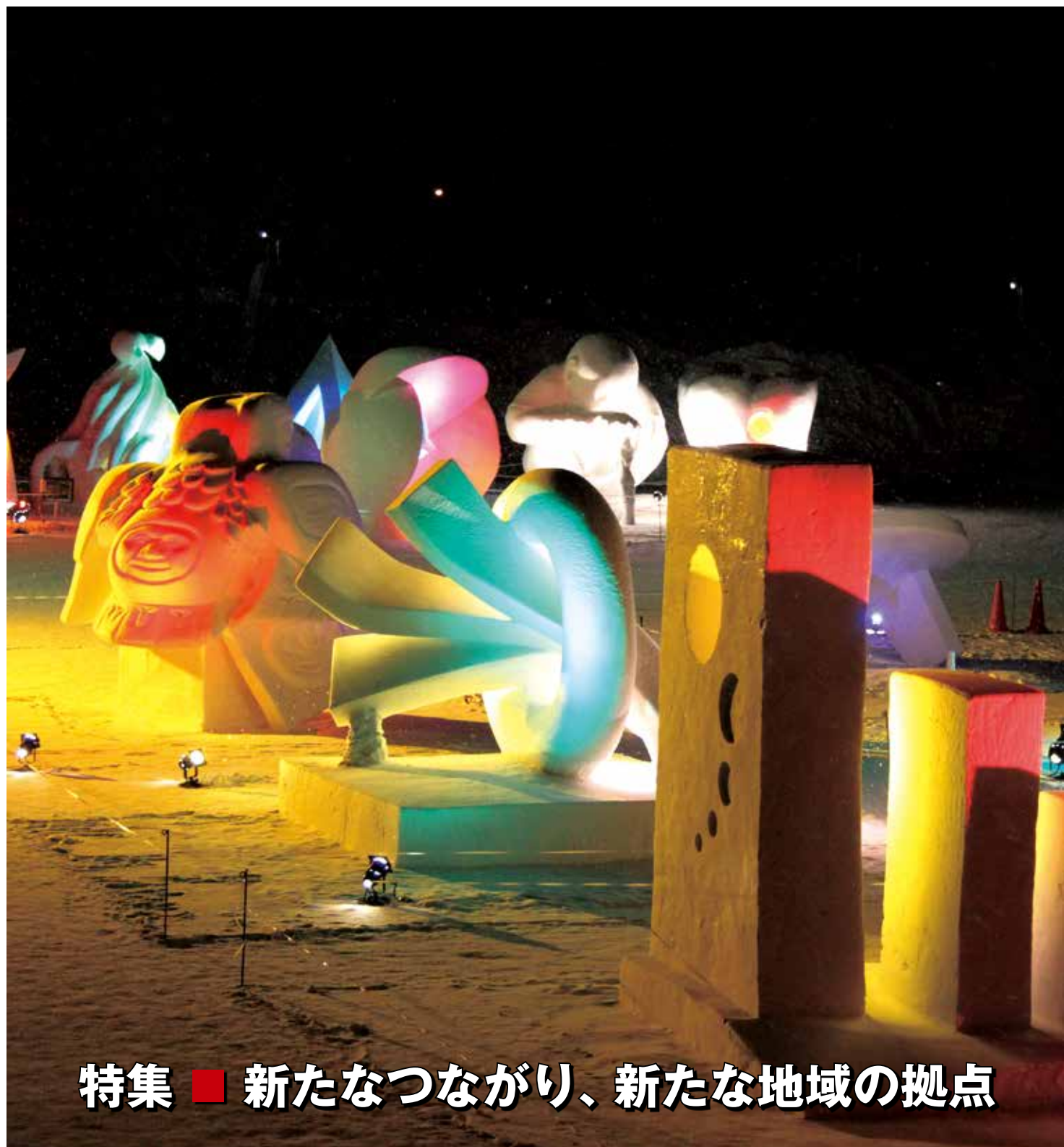
明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2016

2

ISSN 1340-8917



特集 ■ 新たなつながり、新たな地域の拠点

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



1 巻頭エッセー／「世界に羽ばたく“ふじのくに”」へ

川勝平太（静岡県知事）

特集

新たなつながり、新たな地域の拠点

4	基調論文	新たな交流の場、地域拠点、人財育成の場に	鈴木崇弘（城西国際大学大学院客員教授）
8	北海道恵庭市	いつでも どこでも だれでもが本と出会えるまちを目指して	森本未来
10	岩手県	被災地を走る移動図書館で交流の場づくり	三木真冴
12	岩手県盛岡市	図書館×介護施設、待つことを楽しむ空間	沼田雅充
14	岩手県紫波町	公共施設が集客、民間が稼ぐ	佐々木廣
16	宮城県仙台市	地域活性の源は、人のたまり場から	畠山茂陽
18	東京都墨田区	地域住民「パートナーズ」と連携して図書館を運営	石原恵美
20	福井県鯖江市	空きスペースは賑わいの空間に	清水孝次
22	愛知県豊田市	スポーツを学ぶことで地域づくりに貢献	成瀬 徹
24	静岡県静岡市	持続可能な地域社会を、お酒片手に語り合う	井上 泉
26	兵庫県神戸市	商店街全体が図書館となり、まちは活性化	松田 朗
28	愛媛県伊予市	商店街の空き店舗を新たな居場所、多様な交流拠点に	新居田真美
30	佐賀県伊万里市	生涯学習の場としての図書館	末次健太郎
32	副基調論文	本を通じて人とつながる地域交流拠点	磯井純充（まちライブラリー提唱者 森記念財団普及啓発部長）

レギュラーレポート

- 36 平成 27 年度地方創生実践塾 山口県光市
学校経営と地域づくりの一体化 霜川正幸
- 38 平成 27 年度地方創生実践塾 山梨県北杜市
日本の田舎は宝の山 曾根原久司
- 40 移住・交流推進支援事業 北海道名寄市
合宿による交流のまちづくり推進事業 成毛哲也
- 地域づくり団体探訪 熊本県八代市
- 42 次世代のためにがんばろう会
牡蠣殻を使った河川の水質浄化大作戦

自治体アンテナショップ実態調査

- 44 年間売り上げ1億円以上、過去最高の 29 店

首長の思い

- 45 発信します！笑顔と力で地方創生

松浦正人（防府市長）

- 48 センター通信

グラビア

- 2 新たなつながり、新たな地域の拠点

- 46 都道府県漫遊 【山形県】

- 47 手前みそですが… 【滋賀県甲賀市】



問合せ先：NPO法人なよろ観光まちづくり協会
(01654・9・6711)
(写真提供：名寄市)

日が落ちると雪の彫刻は色彩豊かにライトアップされ、灯りの衣装を身にまとった彫刻は彩りを増し、瞬く星空と相まってロマンティックな光景が生み出されます。

今年は2月12日（金）から14日（日）までの3日間、10時から18時（12日のみ12時から18時）まで開催しております。（ライトアップは17時頃から翌朝まで実施）

名寄（なよろ）市の冬の一大イベント「なよろ雪質日本一フェスティバル」。

名寄の冬は氷点下20度を下回ることも少なくなく、その寒さと日本一と言われる雪質を活かしたイベントとなっており、国内外から訪れる芸術家チームがそれぞれの世界観を雪の彫刻で表現し、その腕を競います。白銀の世界に現れる3層四方の雪柱から、わずか1週間ほどの期間で切り出される真っ白な彫刻の数々はどれも美しく、多くの来場者の目を惹きつけます。

なよろ雪質日本一フェスティバル

表紙

（北海道名寄市）

「世界に羽ばたく“ふじのくに”」へ

静岡県知事 ● 川勝平太



昨年の夏、葎山反射炉が世界遺産に登録されました。平成25年に富士山が世界遺産に登録されるや、茶草場の世界農業遺産、南アルプスのエコパーク、世界一の健康寿命など、静岡県は世界クラスの地域資源の数が過去2年半で、なんと23件にも増えました。まさに「世界に羽ばたくふじのくに」の立ち姿が現れてきました。

東京への人口集中が進む一方で、東京の合計特殊出生率は全国最低です。今や東京は日本の人口減少を加速させています。それゆえ「ポスト東京時代」を開く地方創生は日本の最大の課題です。その課題に向けて各界各層の皆様に参加いただき、英知を集めた「美しいふじのくに」まち・ひと・しごと創生長期人口ビジョン」と「総合戦略」を昨年10月に策定しました。子供を2人以上持ちたいという若い世代の希望や、本県で働き、住みたいという希望の実現に向け、「美しく、強く、しなやかな『静岡型』の地方創生」を通して「ふじのくに」づくりを推進してまいります。

昨年の秋、イギリスでのラグビーワールドカップでは日本代表、とりわけ静岡県選手が大活躍しました。2019年の日本大会は袋井市のエコパスタジアムが会場の一つです。続く2020年の東京オリンピックでは、自転車競技の会場に伊豆市が選ばれました。ワールドカップと東京オリンピックを控えたこれからの数年は本県を世界にアピールする絶好

の機会です。台湾のバドミントン選手の合宿は大成功でした。また、モンゴルのレスリング選手団と柔道選手団の事前キャンプがそれぞれ焼津市と伊豆の国市で行われます。スポーツを通じた交流は静岡県民が世界に羽ばたく重要な土台になります。

富士山静岡空港は、海外交流に重要な役割を果たしています。これまでも外国人の乗降客数は地方が管理する空港として全国一でしたが、さらに昨年は国際線の新規就航が急増しました。空の玄関口である本県の空港の一層の充実を図るため、本年も引き続きソフト、ハードの両面で整備を進めます。

静岡県は世界に羽ばたき始めました。県が国際舞台に登場しつつある今、将来を担う世代が国際経験を積むことが求められます。特に十代のうちに海外での体験ができるように、高校生全員のバスポート取得を推奨します。それには、なにより、先生方が積極的に海外経験を積むことが課題です。そのため環境整備を進め、グローバルな人材の育成に取り組んでまいります。

今年は、1876年(明治9年)に静岡県・足柄県・浜松県が統合されて現在の静岡県が生まれて140周年目に当たります。先人の遺徳をしのび、世界の人々を惹きつけ、世界に羽ばたくふじのくに静岡県民の魅力を高め、日本のシンボルである「富士山」の品格ある姿に恥じない「富国・有徳の理想郷」を築くべく、全力で取り組んでまいります。

新たなつながり、新たな地域の拠点



移動図書館の風景

● 岩手県 (p10-11)



「恵庭まちじゅう図書館」参加店で読書を楽しむ利用者

● 北海道恵庭市 (p 8- 9)



官民複合施設「オガールプラザ」の中にある民間経営の産直施設「紫波マルシェ」

● 岩手県紫波町 (p14-15)



「フキデチョウ文庫」で行われたトークイベントの様子

● 岩手県盛岡市 (p12-13)



課題図書を会場で読みながら、すみだや地域について考え、行動に移す読書会・交流会「まちぐるみ読書会」

● 東京都墨田区 (p18-19)



自由に意見を発信する場「ブログロックフェスティバル」

● 宮城県仙台市 (p16-17)



「スポーツ図書館」で行われた先生たちの勉強会風景

● 愛知県豊田市 (p22-23)



えきライブラリー tetote

● 福井県鯖江市 (p20-21)



本を持ち寄って商店街のお店に本を植えに行く（寄贈する）「植本祭」でのイベントの様子

● 兵庫県神戸市 (p26-27)



お酒を飲みながら語り合うグリーンドリンクス静岡

● 静岡県静岡市 (p24-25)



図書館専属の「いすの木合唱団」によるコーラス

● 佐賀県伊万里市 (p30-31)



ぐんちゅう「郡中まち元気サロン来良夢」で焼菓子や雑貨などの手づくり品を販売

● 愛媛県伊予市 (p28-29)

新たな交流の場、地域拠点、人財育成の場に

―サードプレイスの現状と今後の可能性―



城西国際大学大学院客員教授

● 鈴木 崇弘

サードプレイスとは何か

「サードプレイス (The Third Place, 以下TTP)」は、社会学者で米国の都市生活学者であるレイ・オルデンバーグが著書『サードプレイス: コミュニティの核になる』とびきり居心地のよい場所 (2013年)『原題: The Great Good Place (1989年)』で提唱した概念である。

同氏によれば、生活上欠かせない2つの居場所がある。ファーストプレイス (第1の居場所) である家とセカンドプレイス (第2の居場所) である職場や学校である。他方、都市には、もう1つの居心地の良い、3番目の場所 (TTP) が必要であるという。それは、都市には、農村部などの非都市地域にある、居心地の良い環境や場・空間を提供するコミュニティがないからである。

そして、「レイ・オルデンバーグの『サードプレイス』では、米国のこういった都市空間および乏しい飲食文化に焦点を当てながら、学ぶべき反例としてヨーロッパや第二次世界大戦以前のアメリカで見られる地元根付いた、小じんまりした人間中心の社交の場を挙げている。そのような場を総じて The Third Place (サードプレイス) と呼んでいるのである。」(オルデンバーグ: 468)

オルデンバーグは、TTPの西欧での実例として、フランスやイタリアの「カフェ」やイギリスの「パブ」などの代表例をあげて説明する。そこには、米国の飲食施設にはない「ゆとり、活気、コミュニティ」があり、市民の多くが「憩いと交流の場」として、日々利用している。米国の都市は、歴史ある西欧の都市と比してTTPは見劣りしていて、その魅力の弱点となっていること、TTPのあり方で、都市は魅力が大きく左右される

と指摘する。

このように、TTPは、会社や自宅でない第3の場所で、業界・業種の垣根を越えた交流・活動拠点として機能する「心のよりどころとして集う

筆者プロフィール

鈴木 崇弘氏
(すずき・たかひろ)

1954年宇都宮市生まれ。東京大学法学部卒。専門は公共政策。イーストウエスト・センター奨学生として同センター及びハワイ大学等に留学。設立に関わり東京財団・研究事業部長、設立に関わり自民党の政策研究機関「シンクタンク2005・日本」の理事・事務局長等を経て城西国際大学大学院客員教授。PHP総研客員研究員、日本政策学校共同代表等も務める。主な著書は『日本に「民主主義」を起業する』『シチズン・リテラシー』等。

場所」のことであり、そのTTPの必要性和その在り方は、国や地域で大きく異なっているのである。

また、オルデンバーグは、TTPは、固定メンバーがいてある意味クローズドだが、出入り自由なオープンな場であるとも指摘している。

日本のTTP：過去

では、日本にそのようなTTPはあるのだろうか。

日本にも、実はこれまでもさまざまなTTPがあったのである。たとえば、喫茶店、飲み屋・居酒屋、図書館、公民館、あるいは自治会、青年団、婦人会、消防団、異業集交流などである。ただし、これらの場所や仕組みは、企業・組織やコミュニティがある程度機能していた時には、その役割を果たしており、「心のよりどころとして集う場所」であったが、あくまで固定メンバーのクローズドな交流の場に過ぎなかった。

またTTPの視点から、日本の都市をみると、次のような意見がある。

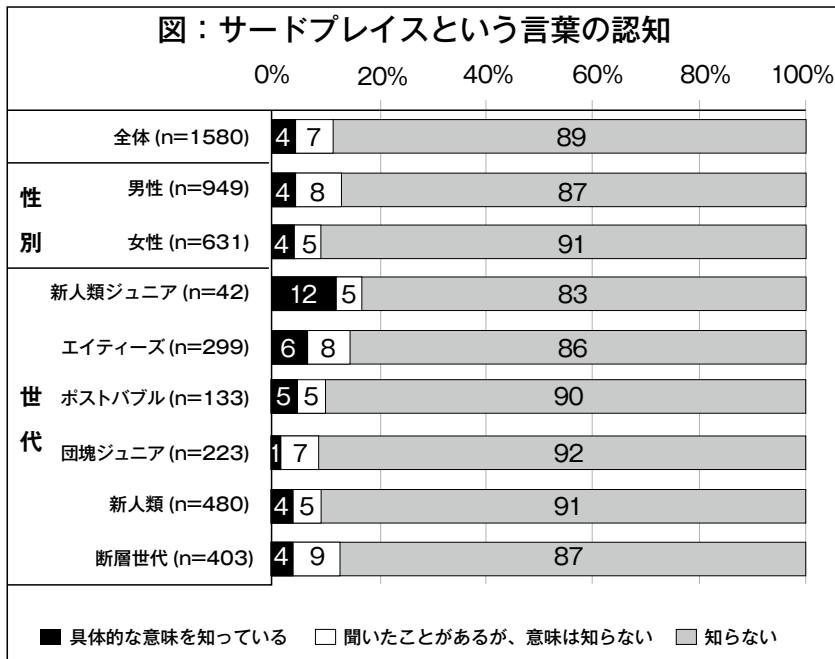
「都市再開発事業および都市再生事業で整備される施設は、住宅（ファーストプレイス）とオフィス（セカンドプレイス）に偏重している。そうして再開発・再生された都市を利用する市民の多くは、住宅とオフィスを往復するだけで1日が終わってしまうような心の豊かさや他者との交流に欠ける生活を送っているようである。この日本の都市の姿は、オルデンバーグが提唱した西欧の『サードプレイス』とは明らかに異なる」（久繁）。これは、人口の都市集中、長時間労働や就社（注

1）の問題などとの絡みで、地域コミュニティの崩壊や都市部でのコミュニティの非形成などの結果として、そのような状況が生まれてきたと考えられるのである。

日本のTTP：現在

次に、現在の日本におけるTTPの現在について検討したい。

（1）社会的認知度



出典：my アンケート [2010]「【自主調査】サードプレイスに関する自主調査～サードプレイスがあると精神的ゆとりが増す傾向～」

(注)・新人類ジュニア＝1989年～1994年生まれ世代（約640万人）。一般には「ゆとり世代」のことで、初代新人類のメンタルを受け継ぐ、生粋のデジタルネイティブ。

- ・エイティーズ＝ブロードバンド環境の進展と共に育った、1980年以降生まれの世代。
- ・ポストバブル＝1976年以降に生まれた世代で、ポスト団塊ジュニアとも言われる。両親共に戦後生まれで、i-podやトヨタ車の好調を支えており、前の世代とは異なる消費行動やライフスタイル。
- ・団塊ジュニア＝団塊世代の子供たち世代。通常、1971年～1974年生まれ世代。就職氷河期を体験し、堅実な消費傾向。
- ・新人類＝1960～65年頃間に生まれた世代。
- ・断層世代＝1951年～1960年に生まれた世代（約1660万人）。
- ・さとり世代＝1980年代半ば以降生まれで、主に2002～10年度の学習指導要領に基づく「ゆとり教育」世代。「さとり」とは、堅実で高望みをしない、現代の若者気質を意味する。

出典：上記注釈は、さまざまな資料を基に、筆者が作成。

やや古いデータだが、2010年実施の「サードプレイスという言葉の認知」に関するインターネット調査（図参照）によれば、TTPという言葉について「具体的な意味を知っている」と回答した者は4%に過ぎなかった。世代別には、若い世代（「新人類ジュニア」など）の方が、言葉の認知度が高いことがわかる。

このようなことから、認知度は高いとはいえないが、今後社会的に広まっていくことが予想される。

表：日本における「サードプレイス」の主な事例

名 称	主催など	場 所	備 考
3 × 3Labo (さんさんらぼ) (2011 年)	エコツツエ リア協会	大手町、 有楽町	展示やイベント・ワークショップを通じて、大丸有 (大手町・丸の内・有楽町) エリアのコミュニティ活動の活性化やビジネス創出につなげる取り組みの実施。期間限定で場所が変更される「仕事の場」であり、会社でも自宅でもないサードプレイス。 http://www.ecozzeria.jp/nipponbldg33/
カタリスト BA (Catalyst BA、略称 CBA) (2010 年～)	東急電鉄や コクヨなど	二子玉川	オープンイノベーションのためのクリエイティブスペースで、「個人と組織がつながり」、「未来志向でプロジェクトを組み立てる」ことで、「新しい働き方を実践する」スペース。 http://catalyst-ba.com/
SYNQA (イトーキ東京イ ノベーションセンター) (2012 年～)	イトーキ東 京	京橋	人々が集い、新しい価値を見出し、発信し、未来のビジネスを創出するコミュニティ。 http://www.synqa.jp/
ゲンロンカフェ (2013 年～)	評論家の東 浩紀氏 (主 宰)	五反田	“会いに行ける哲学者”や“会いに行けるプログラマー”というコンセプトに基づき、言論好きな人の集まる、「言論」と「IT」との融合をイメージした内装のカフェ。以前の文人バーの現代版。 http://genron-cafe.jp/
ファーマーズラボ (2014 年～)	銀座農園、 SPACE DESIGN、 UDS	有楽町	「食」と「農」がキーワード。日本各地からの農業経営者や食品関係者の集合、情報交換やビジネス支援が目的のコワーキングスペース http://www.farmers.jp/
アカデミーヒルズの会員制 ライブラリー (1987 年～)	アカデミー ヒルズ	六本木、 アークヒ ルズ、平 河町	世界中の優れた人・技術・資金・情報が集積し、「創造」「交流」「発信」を可能にする“場”の恒常的提供。大規模国際シンポジウム等のフォーラム機能と共に、ナレッジ・ワークを支える豊かな空間・サービス提供の会員制ライブラリー開設。 http://www.academihills.com/library/index.html
参 考			
地球環境パートナーシップ プラザ (GEOC) (1996 年～)	一般社団法人 環境パート ナーシップ 会議 (運 営受託)	青山	NPO・企業・行政などの多様な主体による環境分野でのパートナーシップ (連携関係) の促進が目的。 http://www.geoc.jp/

(2) TTP の現状

日本では、最近新しい形態のTTPが生まれている。それは、いわゆる「シェアオフィス」「コワーキングスペース」などと呼ばれるものだ。

それは、フリーランサーや起業家、一般企業人などが、各自の仕事やパソコンを持ち寄り、情報

やアイデアをやりとりしながら働く場所、利用者が広まっている。集中できる簡易ブースなどの併用もあるが、壁や仕切りが排除され、休憩スペースもあり、交流がしやすい空間になっている。また、Wi-Fiや電源もあり、ネットなどを通じて、外部とも繋がる空間になっている。さらに、イベントや研究会などもあり、内部同士や外部との交

流が活発化するための仕組みや機会も積極的に企画されている。また、主に月単位契約や年単位契約などの会員制度で運営されているが、数時間から1日利用のドロップインの仕組で外部者の利用も可能になっている。

このようにして、これらの場合は、クローズだが、オープンな場となっており、正にTTPとして機能している。

2013年12月24日付日本経済新聞の記事によれば、このようなTTPは、東京・渋谷が大集積地で、地方都市でも増加しており、全国で約300カ所あり、全体的に広がっているようだ。

(3) TTP の事例

次に、その事例をみていこう。「表：日本におけるTTPの主な事例」をみていただきたい。それらからもわかるように、一部を除き近年に設立されてきている。また、その場やその活動・提供サービスは、セクターや業種・業務などを超えた多様な人々が集い、交流し、触発しながら、新しいイノベーションやビジネスの創出の場所として機能している。

これらの場合は、業界・業種を越えた交流・活動拠点でTTPとして機能しているが、オルデ

ンバークの提唱する憩いのある場や心のよりどころとはやや異なるようである。しかし、日本は、先述のように、時間的・物理的に、仕事や会社・組織への帰属・従属性が高い社会である。その意味では、組織的や役割的な関係が相対的に希薄なTTPは、自由さや開放性があり、「憩いのある場」であるといえよう。

日本のTTP：未来

TTPの今後を考える場合、それは日本における働き方の方向性などと連動すると考えられる。

日本は少子高齢化の関係で、今後生産労働人口が急速に減少し、大幅な労働力不足が予想される。すでにアベノミクスの影響で経済状況が改善する中で、人手不足の状況が顕在化してきている。その状況への対応として、「長時間労働」「就社」「夫は仕事、妻は家事育児」などの従来のような働き方などが大きく変わり、新しい働き方（注2）や職住の場所の新たな関係が生まれないわけにはいかない。

その新しい働き方では、勤労者が、可能な限り働けるように、「だれでも（Whoever）」「いつでも（Whenever）」「どこでも（Wherever）」（3We）の雇用環境が必要になる。そこでは、個人の視点がより重要視され、個々のニーズに即した生活や仕事の仕方、そして働く場所柔軟な選択ができることが必要となる。

その場合、家庭や会社以外の場所での仕事や活動をする機会が増えよう。それは、日本では、職場は家から離れており日々通勤する上で困難があると共に、長期的に家で仕事や活動することの物

理的制約や社会的刺激の喪失などの問題があるからだ。その結果、新たな場となるTTPが必要となる。

また、従来の企業や組織は、外のものを組織の中に内生化して、新しいアイデアの創出や新しい活動・イノベーションを行ってきた。ところが、社会変化の幅とその速度があまりに大きく、かつ人的な資源が激減する現在においては、その対応には限界がある。

これに対して、TTPは、組織の外に、新たな場・磁極をつくり、さまざまな人・組織や情報、アイデアが集まってきて、それらがお互いにつつかり合い、刺激し合って、新たなアイデアやプロジェクトなどを生み出している場なのである。つまり、オープンさや多様・多元性を通じてイノベーションを生む環境を形成する場・コミュニティなのである。

これらの「場」は、終身雇用などから生まれる固定的・組織従属的なコミュニティではなく、専門性や関心をコアにフレキシブルに離合集散し、オープンで自由な人的ネットワークを緩く形成できるものである。

また、これら以外にも、地域で気軽に集まる場である「まちライブラリー」「まちカフェ」「コミュニティスペース」などのTTPも生まれており、地域や個々人の新たな交流の場、地域拠点、人材の育成・成長の場になってきている。

他方、このような新しい場の誕生は、大きく変貌し、多元的で多様な価値がぶつかり合う21世紀では、従来の組織や人的関係・地域などではうまく機能できなくなってきたことも意味している。

このように考えていくと、TTPは、今後ますます増えることが予想される。そこから、新しい地域・コミュニティ、働き方や生き方、そして新たな人材および時代が生まれることが予想できる。

（注1）就社とは、「会社に就職するという考え方です。簡単に言いますと、大企業に入り『安定して暮らし』『安泰の将来』を手に入れるという、仕事に対しての考え方になります。」（キャリアパーク「就社と就職の意味の違いについて」<http://careerpark.jp/2773> 閲覧日：2015年11月28日）

（注2）「新しい働き方」に関しては、「新しい勤勉（KINBEN）宣言」（PHP総研、2015年9月、http://research.php.co.jp/research/fiscal_policy/kinben.php）を参照。

【主な参考文献】

* オールデンバーク・レイ「2013」『サードプレイス：コミュニティの核になる』とびきり居心地よい場所』みすず書房

* 久繁哲之介「サード・プレイスから都市再生を考える」

（http://www.minto.or.jp/print/urbanstudy/pdf/u46_01.pdf）

* my アンケート「2010」【自主調査】サードプレイスに関する自主調査「サードプレイスがあると精神的ゆとりが増す傾向」（http://www.myeng.com/topics/detail.php?topic_id=32） 2010年5月6日

* 日本経済新聞「2013」『コワーキングスペース』急増中 仕事と暮らし、近づく」日本経済新聞（夕刊）2013年12月24日号

いつでもどこでもだれでもが本と出会えるまちを目指して

―市民とつくる交流型図書館、「恵庭まちじゅう図書館」―



恵庭市教育委員会図書課主事

● 森本 未来

緑豊かな北海道の中核的都市

恵庭市は、北海道の道央圏に位置し、充実した都市機能と美しい田園環境、豊かな自然環境を有する人口約6万9千人の中核的都市です。札幌市から車で1時間、新千歳空港から車で30分と、とても交通アクセスに恵まれたまちでもあります。

また、北海道の中では比較的穏やかな気候のため、市内ではガーデニングも盛んです。初夏の時期には、オープンガーデンを見学によくの方が訪れています。

道内初の読書推進条例

「花のまち」として有名な恵庭市ですが、「読書を推進するまち」としても、さまざまな活動に取り組んできました。

平成13年に全国で2番目に実施したブックスタート事業（乳児健診時などに、「絵本」と「赤

ちゃん」と絵本を楽しむ体験）をプレゼントする事業）から始まり、平成16年には道内で初めて市内小学校全8校に専任の学校司書を配置、平成18年には市内中学校全5校にも配置しました。このほか、私立幼稚園等への図書整備事業や家読（うちどく）推進事業、図書宅配サービスなど、子供から大人まで生涯各期において読書に親しむためのさまざまな環境整備を、市民とともに地域ぐるみで進めてきました。

こうした読書環境や、読書が育む人とのつながりを次の世代に確実に引き継ぐため、平成25年4月、道内ではじめての読書推進条例となる「恵庭市人とまちを育む読書条例」を施行しました。この条例を象徴する事業として企画されたのが、「恵庭まちじゅう図書館」です。

本が生み出す「会話」や「出会い」

「恵庭まちじゅう図書館」とは、市内のお店やカフェ、オフィスなどのちょっとしたスペースに、



「恵庭まちじゅう図書館スタンプラリー」での景品「1日館長体験」の様子

店長や経営者、スタッフのお気に入りの本を展示し、訪れた人に自由に読んでもらい、本を通じた会話を楽しむという、新しいかたちの図書館です。店内に本棚と本さえあれば、どんなお店でも登録することができ、ルールは参加店が自由に決められるようになっていきます。

「道内作家の本」や、「バスケットボール」「ガーデニング」「歴史」「マンガ」など、個性的な本棚のある参加店が軒を連ね、軒先にはオリジナルの目印（フラッグ）をかけてもらい、外から見ても参加店であることがわかるようになりました。

平成25年10月に24店舗でスタートし、その後、口コミや募集ポスターなどで知ったというお店が徐々に増え、1年後の平成26年10月には35店舗、そして平成27年10月現在、50店舗が参加していま



参加店の自主イベント「ビブリオバトル」の様子



参加店の自主イベント「絵本作りのワークショップ」の様子

す。「昔から自分の図書館をつくるのが夢でした。この事業のことを聞いたとき、これだ！と感じ、思いついて申し込んでみることにしたんです」と、嬉しそうに語ってくれた「館長」もいます。

◆◆◆ ユニークなイベントを次々に開催

「恵庭まちじゅう図書館」は、市民の新たな交流の場として広まりつつあります。「恵庭まちじゅう図書館」に参加している店舗が主体となつて、自主的なイベントを開催。音楽と読み聞かせを組み合わせたおはなし会や絵本作りのワークショップ、本を持ち寄つてのランチ会、ビブリオバトル、朗読会など、本にまつわるさまざまなイベントとおして参加者の親交を深めていました。

また、SNSやネット上の電話帳サイトを利用した情報発信にも協力していただいております。昨年度からはさらに認知度を高めるべく、「恵庭まちじゅう図書館」参加店をまわるスタンプラリーを、参加店と市立図書館が共同で開催しました。今年度は参加店50店舗のうち27店舗が参加し、図書館長の仕事を体験できる「一日館長体験」や図書館で自分の好みの展示ができる「オリジナル展示」などの景品を用意しました。スタンプラリー参加者からは、「恵庭市にこんなに素敵なお店があるなんて知らなかった」「これからも、いろいろなお店に行つてみたい」「お店に置いてあった本がきっかけで、思わず店長と会話が弾んでしまいました」といった声が寄せられています。また、景品のオリジナル展示に当選した主婦の方か

ら「自分の選んだ本を展示するのは恥ずかしいけれど、誰かに手に取ってもらえるのは嬉しい」との声も寄せられており、本が人と人をつなぐツールになるのだと、改めて確信しました。

◆◆◆ 人と人がつながる特別な居場所

市民と行政が一体となつて作り上げた「恵庭まちじゅう図書館」は、今も少しずつ成長しています。本は、「行政」と「市民」のつながりだけでなく、立場や職業、年齢を問わずさまざまな人がつながるきっかけとなります。「どんな本が好きなのか」「どうしてその本が好きなのか」「好きになつたきっかけは何なのか」を知ることが、その人自身の一部を知ることであり、そのようなコミュニケーションを楽しむことができるのが、「恵庭まちじゅう図書館」です。

このつながりを恵庭市内全域に発展させていきたいと考えています。

恵庭市はこれまで、「いつでもどこでも だれでもが 本と出会えるまち」を目指して、市民の皆さんと共にさまざまな活動に取り組んできました。今後も、本が人と人を結ぶ仕組みづくりや、どこでも読書活動ができる環境の整備、世代を超えた交流の場を提供してまいります。そして、「恵庭まちじゅう図書館」が、一人でも多くの方の「心安らぐ場所」「特別な居場所」となるよう、支援していきます。

被災地を走る移動図書館で交流の場づくり ―仮設住宅の住民を支援―



公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
岩手事務所長代行

・三木 真牙

いわてを走る移動図書館プロジェクト

公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（以下、シャンティ）は1981年に設立以来、アジアでの絵本、図書館を通じた教育・文化支援や国内外の緊急救援の活動を行っています。

2011年3月11日に発生した東日本大震災により岩手県沿岸部の図書館が壊滅的な被害を受けました。特に最も被害の大きかった陸前高田市立図書館は建物だけではなく職員の方が全員死亡もしくは行方不明という惨状に見舞われました。

シャンティの海外での活動の経験から図書を通じた復興支援が出来ないかと考え岩手県沿岸部の避難所を訪ねました。そこで私たちが目にしたのは、全国から物資として届けられた大量の本でした。しかし、本は段ボール箱に入ったままの状態では活用されていないことがありました。避難所の運営者に尋ねると、管理する人がおらず手が回らないこと、また高齢者が多い避難所に絵本がたく

さん届くなどのミスマッチが起きていました。私たちは、ただ本を被災地に送るだけではなく本を管理する人・本を読む空間を含めて支援をする必要があると考え、移動図書館という活動形態を選択しました。活動は「いわてを走る移動図書館プロジェクト」と名付けられました。

住民同士が交流できる場づくり

図書館が震災の影響を受けて再開の目途が立たない岩手県山田町、大槌町、大船渡市、陸前高田市において移動図書館がスタートしたのは2011年7月でした。当時はようやく避難所から仮設住宅への引越しが本格化している時期でした。仮設住宅への入居により避難所時代に課題となったプライバシーが守られるようになりましたが、くじ引きで入居をした仮設住宅もあり、隣に誰が住んでいるかも分からない仮設住宅内のコミュニティ形成が問題視されていました。

そこで、移動図書館ではただ本を貸し出すだけ

ではなく、テーブルとイスを出して、お茶を飲みながら住民同士が交流できる場づくりを心がけました。

本をきっかけに 気軽に誰もが来られる居場所に

2015年12月現在、山田町、大槌町、大船渡市、陸前高田市の約30の仮設住宅を対象に移動図書館を継続して行っています。各仮設住宅を月に2回、1時間滞在することになっており、活動も4年以上継続してきたことから、住民にとっても移動図書館が来ることが生活の一部のように定着していると感じます。土日に巡回しているので、利用する方は男女を問わず子どもから高齢者まで幅広い層の利用があります。仮設住宅では様々な



被災した陸前高田市立図書館と移動図書館車



移動図書館車



陸前高田市災害公営住宅での移動図書館

イベントがありますが、参加者は高齢の女性が中心で、若い人、男性の集客に苦戦している印象を受けます。その中で「図書館」という誰にでも馴染みのある活動であることから幅広い層が利用をしてくれているのだと思います。

私たちは移動図書館の活動中に利用者の方の声を記録し続けています。以下、よく聞く声です。

「移動図書館がなければこうして仮設住宅の談話室に入ることにはなかった」

「本は読まないけど、新聞を読んでお茶を読んでいるのかな」

「〇〇さんって編み物の本を読んだね。編み物を好きな住民を誘って今度みんなで編み物をしましょう」

「ここに来て住民、図書館のスタッフと笑っておしゃべりをするのが楽しみ」

「(手作りのお菓子を持ち寄って) こうやってみんなで食べるから美味しいよね」

「移動図書館の時に住民さんが出てくるので、移動図書館の日に自治会の夏祭りをやることにしました」

利用者の方の声から分かるように移動図書館が本をきっかけに気軽に誰もが来られる居場所になっていることが分かります。

◆◆◆ 災害公営住宅での コミュニティ作りも課題

震災から間もなく5年が経過しようとする中、災害公営住宅の完成、高台移転が進み仮設住宅からの転居が進んでいます。しかし、いまだに岩手県全体で仮設住宅の入居率は約60%(岩手県HP、2015年11月30日現在)もあります。

こうした

中、仮設住宅での避難生活が長期化していることに加え、仮設住宅から転居が進む中、仮設住宅に残らざるを得ない人たちの精神面や生活環境の悪化が懸念されています。また、仮設住宅

から転居が進むことで今後、仮設住宅が統廃合され今までに築いてきたコミュニティがさらに分断される可能性があります。

仮設住宅だけではなく、そこから転居した災害公営住宅でのコミュニティ作りも今後の大きな課題となってきます。

シャンティは今後も仮設住宅での暮らしが長期化すること、仮設住宅後の課題に対して、地元行政と共に対応しています。

例えば山田町では、元々移動図書館を行っておらず、シャンティが単独で活動を行ってきました。そこで、2014年より山田町立図書館と議論をしながら協働して活動をしていくことになり、2016年以降は山田町立図書館がシャンティの移動図書館を引継いで継続してくれることになりました。

陸前高田市では2015年より災害公営住宅での移動図書館を市立図書館と合同で開始しました。シャンティは市立図書館の移動図書館に同行し、テーブル、椅子を出してお茶を飲みながらおしゃべりができる空間を作っています。巡回している災害公営住宅にはシャンティが対象としている仮設住宅から引越した方がいます。今後は市立図書館の移動図書館を利用していただくよう促し、市立図書館のスタッフへ顔つなぎをすることを心がけています。

岩手県沿岸部において仮設住宅が解消されるのは2018年以降になると言われています。長期化を強いられる避難生活を送る方にとって移動図書館が心の支えになり、一日も早く仮設住宅から出られることを祈っています。

図書館×介護施設、待つことを楽しむ空間

―サービスを提供する側も受ける側も居心地良い場所に―



一般社団法人しあわせ計画舎代表理事

沼田 雅充

出会いのタイミングと法人設立

2012年、勤めていた事業所をやめた。ご存じのとおり介護の現場は玉石混交で、務めていたところは「石」だったからである。いわゆるブラックだった。2011年、別の事業所をクビになり、その当日、声がかかったので翌日から働き始めたが想定外の黒さだった。

そこから一緒に逃げだした同僚と共に「一般社団法人しあわせ計画舎」をバタバタと手探りで立ち上げた。盛岡市で運営する盛岡市産業支援センターに開設準備室を間借りし、岩手大学産学官連携研究センター（コラボMU）と接触し、銀行の口座開設、法人印の作成、司法書士への法人登記の依頼、工務店との交渉、デザイン会社との打ち合わせ等々、様々な事を一気にやらねばならず、今思えば無駄な出費も多々あったと感じる。

しかし、不思議なものでタイミングとしては「ここ」しかなかったと思わざるをえない。盛岡の本

に関するイベントでの南陀楼さん、藤原さん（岩手大学）栗沢さん（さわや書店）との出会い。さらには、2012年度のfacebookアプリアワードと2013年度のグッドデザイン賞を受賞した図書貸し出しシステム「リブライズ」を運営している地蔵さん、川村さん、岩井沢工務店さん、マルツ工房さんの協力とタイミングが前後に数か月ずれただけで「フキデチョウ文庫」は存在できなかったと思う。

地域の中での立ち位置

「図書館×介護施設。どこからその発想が出てくるのですか？」という質問をしよっちゅう受けるのだが、自分にとっては別段特別なことではない。地元で生まれ、地元で働き、地元の人と結婚し、本が好きで介護職についている人間の発想としては至って普通なのではないか？しかし、自分で始めるとなると介護を取り巻く環境や地域住民視点での地域福祉の実践を考えねばならず、その

ためには施設のグランドデザインを地域の人と一緒に考えて考えなければ絵に描いた餅と化してしまう。このため、五味さん、藤原さん、栗沢さんに相談をして2012年のクリスマススイブに五味さんのゼミ生に中心となってもらいワークショップを開催した。ワークショップには30人ほどの参加者があり地元新聞にも取り上げられ、手ごたえのある結果だった。このワークショップにはもう一つの目的があった。それは、今後、施設に継続的にかかわってもらえる人材の発掘である。

普段介護施設で行われる行事は多くの場合、職員が企画して残業しながら準備をし、行事が終わるとヘトヘトになって通常業務に支障が出る。これでは本来の業務や肝心の利用者さんとその家族の関係性づくりがおろそかになる可能性があるのので、行事やイベントに関する部分を誰かに担ってもらおうという魂胆である。介護職員は福祉や介護の専門職ではあるが、手芸や絵画、音楽などの余暇活動をもれなく備えているわけではないので、ついつい安易に提供できる塗り絵や計算ドリル、童謡唱歌の合唱に走ってしまうのだらう。プラス季節の行事の企画などが入ることで、その業務が職員のストレスになったのでは元も子もない。そこになにか工夫が必要である。

例えば、今まで「フキデチョウ文庫」で行われたイベントの一部を紹介すると、「本の世界をさがそう盛岡散歩撮影会」「町内会、商店会、子供会共催のハロウィン、クリスマスイベント」「さわや書店による作者、作家との交流イベント」「カレーキャラバン」「岩手大学、岩手県立大学との連携」があげられる。



「フキデチョウ文庫」での子供会活動 商店会共催ハロウィンランタン作り

行政や施設、学校、病院、マスメディア等々、サービスを提供する側の都合や思い込みで線引きや目に見えない壁を作る傾向がある。

さらにサービスを受ける側も壁に守られていた人々は様々な理由づけをして壁の存在が必要だという言い方をする場合もある。壁は「あってもなくても良い」と思っている。サービスを提供する側、受ける側、どちらも居心地の良い場所になればよいと思う。そして、他者が選んだ場所をむ



「フキデチョウ文庫」で行われた近隣小学校の総合学習「まち探検」の様子

居心地のいい場所に

やみに批判しないこと、目の前に困っている人がいれば年齢、性別、障がい、病気のあるなしにかかわらず手を差し伸べる場所、仕組みを考えたい。

特に岩手大学の五味さんを介して知り合いになった「カレーキャラバン」は、ぼんやりとしていた地域での立ち位置を明るく照らしてくれた。

ここでは「カレーキャラバン」を引き合いにだし「フキデチョウ文庫」のありかたを説明したい。「カレーキャラバン」は、まちの一角で鍋を炊いてカレーをつくるとき、きちんとした予定やレシピ、詳細な記録、意味や効率の良さといったものを考えずに、ある時点でカレーが出来上がり、鍋を囲んで一緒に食べている様子をイメージし、臨機応変に役割分担しながら、潤沢な時間を共に過ごし結果より過程を大切にしたいとしている。

「フキデチョウ文庫」も、予定調和をなるべく排除してスピードや効率を重視した空間ではない、のんびりと「待つ」ことが求められ「待つ」ことを楽しむ寛容さを求められる空間でありたい。

さらに「カレーキャラバン」の皆さんは活動の継続性を持たせるための工夫について「ビジネスモデル」を考えることなく、カレーの鍋を通して新しい「モデル」に思いをめぐらせたいと述べている。また、「あたらしいモデルは私たちの供出する精神に支えられながら居心地のいい場所をつくる赤字モデルと言うべきものだ。どれほど頑張っても試みたとしても私たちがまちで人と出合いながらカレーをつくりあげた居心地のいい場所での体験は現場へとあるいは私たちの体のなかへと消えていく、おそらくはその体験の中に新しいモデルのヒントがある。だからこそ、赤字覚悟ですめるのである。覚悟というよりも態度かもしれない」。これを「カレーキャラバン」の加藤文俊さんの口から直に伺ったとき、自分の中でモヤモヤが言語化されたと感じた。まさに

に腹に落ちた瞬間だった。

しかし、介護施設は始めたら後に引くことはできない。介護の担い手が減り縮小、閉鎖に追い込まれる施設が少なくない昨今、覚悟をもってあたらしい「モデル」を生み出す試みは必要なのではないか？「フキデチョウ文庫」がその試みの布石になり経営ではなく態度としての実践モデルになるための実験は明日も続きそうである。

公共施設が集客、民間が稼ぐ

―公民連携による都市整備とにぎわいづくり―



オガール紫波株式会社 代表取締役

・佐々木 廣

紫波町「公民連携元年」

2007年当時、紫波町の主要な行政課題は①JR東北本線紫波中央駅前の町有地10・7畝の活用②1963年建設で老朽化が進む役場本庁舎の建替え③それまで町になかった図書館の新設―の3つでした。

紫波中央駅前町有地10・7畝は、1998年に請願駅として整備された紫波中央駅の設置に合わせて町が28・5億円で購入した土地です。取得以来約10年間、町の財政難から、そのほとんどが未利用の遊休不動産となっていました。町は2007年を「公民連携による新たな視点でのまちづくり元年」と宣言し、東洋大学と調査を行うための協定を締結しました。2009年に紫波町公民連携基本計画を策定し、「都市と農村の暮らしを愉しみ、環境や景観に配慮したまちづくりを表現する」という理念を掲げ、同年6月にオガール紫波株式会社（オガール紫波）を設立しました。

「町の代理人」オガール紫波

オガール紫波は、地域経営的視点から総合的な調整・プロデュースを行ういわゆる「町の代理人」として活動することを目的とした第三セクターです。町の代理人として、町からの委託事業により、緑の大通り「オガール広場」を中心に、両側に大規模施設4棟を整備する駅前町有地（オガールエリア）のマスタープランを描き、「民間活力の誘導」と「デザインガイドラインの策定」、そして「情報発信」を行いました。設立当時オガール紫波の事業部長を務めていた岡崎正信氏（現在、オガールプラザ（株）とオガールベース（株）の代表取締役）は、「まちづくりとは不動産価値の向上である」という信念を持ち、公共施設整備と民間の経済開発を合わせた複合的な開発を行うにあたり、景気に影響されない集客、つまり消費を目的としない人を集める仕掛けをつくることから始めました。

官民複合施設オガールプラザの整備

2012年にオープンしたオガールプラザは、「紫波町情報交流館（図書館と地域交流センター）」とオガール紫波が経営する「紫波マルシェ」、民間テナントや子育て応援センターからなる官民複合施設です。

オガール紫波は、町から公共施設の整備を委ねられる形で、公民連携による整備スキームを構築し、民間の市場原理から施設整備を行うことにしました。具体的には、まずテナント賃料を明確に



オガールエリア（駅前町有地）の施設配置計画図



官民複合施設「オガールプラザ」の全景



官民複合施設「オガールプラザ」と緑の大通り「オガール広場」

して設計前にテナントの誘致を実施し、テナント入居率100%を達成した状態で、政府系金融機関と町からの出資、東北銀行からの融資を受けるための協議を行いました。その条件を整理した上で、公民連携手法である2段階のプロポーザルを実施しました。建設と資金調達、所有、運営を担う特別目的会社として、子会社である「オガールプラザ(株)」を設立。費用を抑えつつ、デザイン性に優れ「身の丈にあった」施設整備を行い、完成後に中央棟の情報交流館を町に売却しました。

◆◆◆ 公共施設が集客装置、「稼ぐインフラ」

町民の10年に渡る活動の成果としてできた図書館は、町の産業を支援する図書館でもあります。

地域交流センターは、多種多様な市民活動の交流拠点となっています。外にはオガール広場があり、これら公共施設が集客装置の役割を果たしています。

私たちが経営する紫波マルシェは、会員302人が出荷する新鮮な農産物や加工品が並び、鮮魚と精肉それぞれの専門店、6次産業化から生まれた店舗などが入る産直です。町外からのお客様のみならず、立地性からスーパー代わりに利用するお客様も多く、おかげさまで売り上げも順調に推移しています。

公共施設は魅力的な活動により集客装置の役割を果たし、私たち民間は行政に頼ることなく、この集客性を利益につなげるべく努力を重ねています。また、複合施設ならではの取り組みもあります。

例えば、図書館の司書がおすすめの料理本を紹介するポップ(広告)を作り産直の棚に設置することで、図書館と産直の間の人の流れを促しています。

さらに町には、オガールプラザの民間部分の地代と建物の固定資産税が入ります。これが昨今、「稼ぐインフラ」として評価をいただいている仕組みです。

◆◆◆ 公共空間と施設の一体的活用

オガールエリアには他にも、2011年に岩手県サッカー協会が整備した「岩手県フットボールセンター」や、2014年に完成した、バレーボール専用体育館とホテルを中心とする民間複合施設「オガールベース」があります。紫波型エコハウス基準を設けたオガールタウンは、町が宅地を直接分譲し、町内の工務店がエコハウスを建築しています。民間事業者が運営するエネルギーステーションは、木質チップを熱源として、エリア内の住宅や施設に冷暖房用や給湯用の熱を供給しています。2015年5月には役場新庁舎も開庁しました。

そして現在、オガール紫波が出資する官民複合施設「オガールセンター」の整備と、民設民営保育所の整備が予定されています。これで、オガールエリアの整備は一区切りを迎えます。

オガールエリアに来ていただくと、公共施設と民間施設の明確な区別がないことにお気づきいただけると思います。官民間問わず、公共空間と施設の一体的活用に努め、ご来場いただく方にとって、居心地の良い空間を目指しています。今後も、施設内のテナント同士の連携は元より、エリアを構成する主体が連携し、町内外の市民活動や民間の経済活動を誘導、支援することで、人と環境に優しく、誰もが笑顔でチャレンジできる場として、オガールエリアの価値の向上に努めていきます。この努力こそが、オガールエリアを持続的に魅力のあるエリアにしていくと思います。

地域活性の源は、人のたまり場から —価値観の違う人が集う「大人の部室」・ビズカフェ—



NPO法人ファイブリッジ理事長

・ 畠山 茂陽

札幌の「ビズカフェ」との出会い

きっかけは2004年6月、札幌で出会った北海道新聞社の吉村匠さんとの出会いからだった。当時、札幌駅北口にあった「サッポロ・ビズカフェ」に案内された。新聞社で働く傍らNPO副理事の

肩書きを持ち、会社からの業務を超えて、地域のために活動する姿にカルチャーショックを覚えたのだった。

目的に対し共感する仲間といつも話し合える拠点があったなら……。宮城・仙台にそうした場所があるか調べていくと、行政主導の施設は時期がくると消滅し、民間有志が中心となり社会的な課題を解決し得るスペースは少ないことがわかった。

仙台にも「ビズカフェ」を開設しようと呼びかけた。賛同者が1年程で物件を紹介してきた。仙台市青葉区北目町・五橋地区のビルの一角。それが今の「Five Bridge（ファイブリッジ）」。オープンにこぎ着けたのは2年後、2006年6月のことだった。

イッデモ・ダレカト・ツナガレル 「大人の部室」

多くの人が「ひとりだけでは束になった活動ができない」などの悩みを抱えている。Five Bridgeには「現状を変えたい」「地域に貢

献したい」と考える人が集まってくる。「想いを共有」し、自然に「マッチング」が図られ、「人間的なスキルアップ」に直結する拠点。「イッデモ・ダレカト・ツナガレル居場所」機能としての、コミュニティが必要とされていることを実感している。

Five Bridgeのコンセプトは、「大人の部室」というキーワード。地域の課題解決に必要とされるプラットフォームを目指し10年を迎える。新たな産業の芽となる人材の育成や様々なリソースを持つ人材が繋がることによって、通常の枠組みでは構築できないプロジェクトに挑戦する環境を生み出してきた。

Five Bridgeに集うメンバーは、事業で大きな利益を目指すよりも、社会的意義がある仕事をしたいと考える人が多い。「たとえ事業に失敗してもここに戻ってくれば温かく迎え入れてくれる。親戚みたいな距離感で接しているから」との声をいただいた。無目的でも集うことの意義を伝え、「新しい概念の親戚（ネオ親戚）づくり」との価値観を提唱している。

助成金に頼らない自立運営モデル

Five Bridgeの理事メンバーは全員兼業で無報酬だ。人件費をかけないこともあり、これまでほぼ単年度赤字で切り盛りしている。余力がある範囲内で施設を整備し、安定維持を図っている。8階建てのビルの1・3・4階、約20坪のスペースを4室借り、7つの法人が入居。シェアオフィスで年間収入の約7割を獲得し、会議室利



Five Bridgeがある仙台市五橋界隈



夜な夜な人が集うフリースペース



多様な属性・価値観の人々が集う「たまり場」



人が集うことで新しいNEWSが生まれる

用料、セミナー参加費、会費により助成金に頼らない運営を行っている。

恒常的な活動拠点を確保することにより、活動のアクティビティーが充実。相互連携の拡大が図りやすく、フランクな連携・交流の場となっている。「誰かが、イッデモ、いる。どこかで、ダレカがツナガル。そして、ビジネスや夢を、生む」。そんなサイクルがFive Bridgeコミュニティの強みなのだろう。

◆◆◆ 災害時にも活かされるフリースペース

Five Bridgeに集う人々は、行政マン、マスコミ、起業家、フリーランス、学生やOL。特に農家や漁業者などの生産者や食品製造に携わる者が多い。突飛なアイデアも、自由な発想で形にする風土がある。中でも、各自が伝えたいことを発信する「ブログロックフェスティバル」は毎

年開催。近隣の公園に作り出したお祭り「イッフェス」を10年サポートするなど、その他各種サークルが今でも続いている。

震災時には、生活復旧のためのボランティアスタッフの拠点として活用された。「たまり場」に集う人同士のネットワークが、未曾有の震災を前に強く結びつき、定期の情報交換会を通じ、新しい概念のマイクロファイナンス「被災地応援ファンド」構築の支援にもつながっていったのだ。

◆◆◆ 「続けていく」ことが最大の使命

Five Bridgeに入居する法人が学生と企業をつなぐ事業を行っているため、若い世代が毎年流入し活性化がはかられている。しかし、組織としては10年が経ち、コアメンバーの再構築は今後必要だろう。兼務者による運営では、コミュニティを発展させるパワーが割けず、専従者の

存在は積年の夢だ。コワーキングスペースが市内に複数できるなど、Five Bridge「卒業生」の活躍のステージの提案、次世代への文化の伝承をどのように行いか継続の鍵だ。

◆◆◆ NEWSを生み出すメディアに

Five Bridgeは、会社や組織の枠組みを超えた、個人のつながりを重視したコミュニティだ。ビジネスだけのつながりでは、相互扶助の精神は生まれにくい。地域防災の観点からも、コミュニティの重要性を強く訴え、次の3点を最後に提案したい。

1つ目は、「会社と自宅の間に、もうひとつの居場所を見出すこと」だ。これは、私たちが今すぐできることだろう。2つ目は、「約2割の時間を地域のためにいいこと」に取り組むこと。これにより、自分の人生も豊かになり、活動で得られた人脈を財産に、地域の生活者としての存在理由（レゾンデートル）が広がることだろう。3つ目は、「人との絆で解決する世の中に」。身近な人に対する愛情が、豊かな地域を創るはじめての一歩だと思うのだ。

どんなに社会環境が変わっていくとしても変わらないものは何か。それは「地域に生きる人」。地域のために発信する人が集う場が、NEWSを創り出すメディアとなり得る。Five Bridgeを通じて、情報の発信源となり、地域に生きる人の価値を創造する場をコーディネートし続けていきたい。

地域住民「パートナーズ」と連携して図書館を運営 —中学生がイベント企画、ビジネスマン向け講座も—



墨田区立ひきふね図書館 館長 ● 石原 恵美

◆◆◆
新たな図書館サービスをめざして挑戦

数ある公共施設の中で、あらゆる世代の方が日常的に利用する図書館には、現在、資料の提供にとどまらず、人々のふれあいの場や地域活動の拠



読書と持久力競技を組み合わせた新しい読書協技（競技）「READATHLON（リードアスロン）読書会」で、8時間という長時間の読書会に挑み、みごと完読賞を手にした参加者



まちライブラリーに寄贈された本を見て、「子どもの本から大人の本まで揃っているから、家族全員分の本を借りて行きます」と楽しそうに本を選ぶ親子（手前）。ミニセミナー「イクメン、集まれ！」（奥）

点としての様々な機能が求められています。このような図書館を実現させるため、ひきふね図書館では、区民ボランティア団体「墨田区ひきふね図書館パートナーズ」の皆さんと協働することで、利用者の目線を図書館の運営に反映させています。

パートナーズは、メンバー自らが事業を企画するという点に大きな特徴があります。メンバー一人ひとりのアイデアが充分に発揮された企画が提案され、メンバー全体で内容を精査していきます。どの企画も利用者の目線に立った内容です。

で、参加される方からは毎回ご好評をいただいております。例えば、子どものお気に入りのおいぐるみが図書館にお泊りする「おいぐるみお泊り会」では、「おいぐるみ」が図書館にお泊りしてどんなことをしていたか、家族でも楽しく話ができて良かった」と、家庭で図書館が話題となり、親子の身近な施設となったことが伺えます。

また、中高生を対象としたビブリオバトルでは、若者を温かく見守る年配の方や、「あまり本が好きではないのですが、今日のプレゼンで、読んでみたい本ができました」と読書のきっかけになった方の声が集まりました。合わせて実施した声優をめざして専門的に学んでいる高校生による朗読劇を観た方には、「私も将来声優になりたいので、とても参考になりました」と夢に向かう原動力になったようです。

◆◆◆
このように、年間約60ものイベント・事業を実施し、参加者から満足度の高い声が多く寄せられる背景には、図書館とパートナーズの協働が欠かせません。

「墨田区ひきふね図書館パートナーズ」誕生

墨田区では、平成25年度のひきふね図書館の開館に合わせ、地域の住民と連携しながら図書館を運営する体制を整えるため、「墨田区新図書館開館プロジェクトリーダー養成講座」を実施しました。この修了生により設立した団体が、「墨田区ひきふね図書館パートナーズ」です。「墨田区協治（ガバナンス）推進条例」に基づき、図書館との協働で実施しているボランティア団体で、図書



馬頭琴の生演奏をBGMに行う絵本「スーホの白い馬」の朗読。このあと、写真を交えてモンゴル文化を紹介



図書館にお泊りしているぬいぐるみたちが、真夜中に起き出しておはなし会を始める「ぬいぐるみお泊り会」

館を地域社会の発展につながる場として提供し、図書館利用の促進と読書活動の推進を目的とした活動を随時、実施しています。

○特徴1…行政との協働による活動

利用者の目線に立った事業・サービスを提供するという共通の目的をもち、図書館とパートナーズが互いに得意分野を分担する協働の体制を実現しています。

○特徴2…自主的・主体的な活動

図書館の特定の事業・サービスを提供するのではなく、図書館に望ましい事業・サービスを利用者の目線で考え、それを実現するための企画を提案・実施しています。

○特徴3…地域の課題解決の場としての図書館を実現する活動

図書館は本の貸出業務だけではなく、課題解決の場としての機能を有しており、その機能を活かした企画を実施しています。

◆◆◆ 共通の目的と対等な立場で協働を実現

墨田区立図書館では4つの方向性を定め、「生涯学習の拠点としての図書館」「情報センターとしての図書館」「課題解決を支援する図書館」「文化交流の場としての図書館」をめざして取り組んでおり、図書館とパートナーズは共通の目的のもと、互いに得意な分野を分担し、対等な立場で協働しています。パートナーズが企画した事業の一部をご紹介します。

◎ビジネススマンのための教養講座

図書館は本の貸出業務だけではなく、課題解決の場としての機能を有することを利用者に周知するとともに、ビジネスマン・事業者の図書館利用につなげることや、事業者・経営者支援による地域活性化、主にビジネスシーンで役立つ技術の習得・向上を目的として、「ビジネススマンのための教養講座」を定期的に開催しています。

参加者からは、「自分以外の価値観を持っている方々とお話できてとても楽しかった。縦割り・横割り社会をどうやって変えていくのか、自分ができることを考えたい」と、講座で得た知識をビジネスシーンに活かそうという意気込みを感じる事ができました。

◎まちライブラリー&ミニセミナー

寄贈された本に、寄贈者や読者が想い・感動などのメッセージをつづっていくことで、本を通して人の縁を紡いでいく取り組みを実施しています。また、毎月1回の寄贈された本の貸し出しと合わせて、交流会形式のミニセミナーや、課題本を会場で読みながら地域について考え、行動に移す読書会・交流会も実施しています。

平成26年8月には、まちライブラリーを実施している全国の団体の中から、区民と行政が協働で活動し、まちづくりに貢献していることが評価され、「マイクロ・ライブラリーアワード」を受賞しました。

◎ひきふね図書館おもてなし課

図書館の魅力について深く知るとともに、人が集う図書館を目指した企画を行うなど、図書館をより楽しい場所にするために活動する区内在住の中学生を募集し、「ひきふね図書館おもてなし課」として活動してもらう事業を展開しています。主催イベントを企画するほか、ひきふね図書館の特集・展示を企画する活動も行っています。

◆◆◆ 図書館からまちづくりを推進

ひきふね図書館が利用者の皆さんの自慢の図書館となるような、また、知識・情報が集まり、人が集い、交流が生まれる、まちづくりの重要な拠点となるような図書館をめざして、今後もパートナーズの皆さんと図書館が車の両輪のような関係となつて、図書館を育てていければと願っております。

空きスペースは賑わいの空間に

―ハンデキャップ者と協働運営のコミュニティカフェ―

NPO法人 小さな種・こころ理事長 ● 清水 孝次

◆◆◆
コミュニティカフェからスタート

当法人の活動の始まりは、2003年にまでさかのぼる。当時、鯖江市の大型公共施設の一つである多目的ホールの附属レストランが、数年にわ



カフェスタッフ cafe & lunch こころ前にて

たり営業されない状況にあった。市から相談を持ちかけられたNPOの中間支援活動を展開するNPO法人・さばえNPOサポートは、数回にわたるこの空き店舗の有効活用をテーマとしたワークショップを実施。その結果、翌年には市民有志が集うコミュニティカフェ設立準備委員会が立ち上がり、①地産地消と地域の食文化の継承を専らとした食育活動の推進②障がいがある方の積極的な雇用の場づくりの推進③の2点を事業の目的として掲げ、カフェの早期開業に向けた活動をスタートさせた。

鯖江市は1995年に開催された体操世界選手権鯖江大会を機に、市民のボランティア活動が盛り上がり、他市町村ではあまり例のない「市民活動によるまちづくり推進条例」が整備されていた。この条例を活用し、コミュニティカフェ設立準備委員会は鯖江市とパートナーシップ協定を締結、行政と市民による協働の取り組みがスタートした。その内容の要点は、①行政はバリアフリーを基本とした改修工事を行う②市民側は厨房設備

や食器、椅子テーブル等の備品関係を準備する③の2点であった。市民有志からなる準備委員会の士気は非常に高く、食育活動支援グループとチャレンジ雇用支援グループが丸となり、資金集めや備品購入、メニュー開発までを進めた。同時に、県内外の視察も活発に行われた。

2005年の4月、コミュニティカフェ「cafe & lunch こころ」は、2人のチャレンジを含む6人の専従スタッフ体制の下でオープンした。これに3組のボランティアワンデーシェフ、更に広報、営業から事務作業に至るまでをサポートする多くのボランティアも加わり、総勢50人を超えるコミュニティ実行委員会が立ち上がった。初期の経営は決して楽ではなかったものの、看板メニューである日替わりヘルシーランチの評判に加えて、年に数回開催されるコンサート等の交流イベントも支持を得て、徐々にこころファンを増やしていった。

その後5年間の活動の実績と安定した運営基盤が、さばえNPOサポートからも高く評価され、実行委員会はNPO法人格の取得を決意し、2011年10月、NPO法人「小さな種・こころ」は誕生した。この時、休耕田をフィールドとしてスタートした「こころファーム」の取り組みは、県の新しい公共の場づくりのモデル事業にも採用され、2人の農業指導職員並びに、精神にハンデキャップを持つ4人のチャレンジ職員が採用が決まった。

その後、当法人による障害者就労支援A型事業所開設を求める声は日ごと強くなり、県への申請を経て「こころ」開所の運びとなった。

◆◆◆ チャレンジド流まちづくり支援がこころのポリシー

NPO法人格取得時の定款には、事業目的のひとつにまちづくりの支援が、チャレンジドの就労支援と並列して謳われていた。しかし、A型事業所の開設を申請する際に、定款の改正が求められ、全ての事業目的は「障害を持った方々を支援するため」と変更された。無論、この新たな定款は遵守しなければならない。ただ、「小さな種・こころ」は、時代は変わろうとも「人と人の支え合いのまちであってほしい」「市民交流の豊かなまちであってほしい」という故郷鯖江市の願いから誕生したNPO法人である。その願いは、今の事業所運営にも引き継がれ、「小さな種・こころ」のもののづくりに、細部に至るまで一切の妥協はない。日替わりランチ、手打ち蕎麦にオリジナルスイーツ



ファームスタッフ 第2農園にて



原木椎茸のほだ場にて



HIBI ★ Chazz-Kのメンバーと清水理事長

など、どの商品も「鯖江でしか味わえない」「鯖江にしかない」オンリーワン商品としてのこだわりをスタッフは求め続けている。また、カフェに始まり農園、里山事業の全てが、だれも手を差し伸べない空き店舗や休閑地を利用している取り組みである。このような故郷支援に「小さな種・こころ」がチャレンジできるのは、こころの要となつて働くチャレンジド職員、指導職員の皆さんと、物心両面から支援して頂いているNPO社員の方々の深い絆の賜物であると感じている。

◆◆◆ ファーム事業でトマトや椎茸の栽培も

2015年1月、当社は市内の他のNPO法人と協働事業体を結成し、鯖江市と新たなパートナーシップ協定を締結、JR鯖江駅2階に「えきライブラintree」をオープンした。こ

こには、鯖江市立図書館の分館的な機能、焼き立てのオリジナルスイーツや本格手打ちそば等の飲食物のサービス機能、更に夜のライブステージ機能に備わり、23年間続いた空きスペースは、徐々に賑わいの空間に変貌を遂げつつある。現在、4人のチャレンジドスタッフが、それぞれの持つ得意技を活かして苦手を補い合い、ほぼ全ての業務が彼らの手で遂行されている。

ファーム事業には、現在10人のチャレンジドスタッフが配属され、福井県で開発されたミディトマト「越のルビー」の栽培を始めとして年間20種類以上の無農薬又は減農薬野菜の栽培を行っている。更に、同ファーム野菜を使用し、地元食品メーカーの協力の下で「越のルビーカレー」を製造、二つの自社カフェで提供し好評を得ている。

また、今年で4年目となる原木椎茸栽培は、このファームの収益の柱として期待されている事業である。県民生協を始めとするスーパーで主に販売され、一部は干し椎茸としても出荷している。中でも主力商品である「越のてまり」は、来年度以降「香福茸」の名称で福井の逸品として新たなブランド化が図られることが決定している。

NPOとしては、かなり思い切った先行投資や、そのための資金調達を実施し、当法人は、まちづくりの最前線でチャレンジドの皆さんの働きの場づくりを行ってきた。その成果を市民の皆さんがどのように評価されるのか、これからがまさに正念場である。

スポーツを学ぶことで地域づくりに貢献 — 体育・スポーツの専門図書館、文化拠点として —



NPO法人 体育とスポーツの図書館館長

・ 成瀬 徹

地域とともに

私たち「体育とスポーツの図書館」(以下「スポーツ図書館」)は愛知県豊田市足助町(あすけちょう)にあります。この町には、紅葉の名所として知られる「香嵐溪(こうらんけい)」があり、シーズ

ンにはたいへん多くの観光客でにぎわいます。また、江戸時代から明治にかけて三河湾の塩などを信州へと運んだ「三州街道(塩の道)」の宿場町として栄えた地でもあり、現在も当時の町並みが残されています。

歴史と自然に包まれたこの町の高台に「スポーツ図書館」は建っており、周囲を山に囲まれ大変静かな環境にあります。

図書館の建築にあたっては、建物の借用からはじまり、改築設計、内外装の工事など、ほとんど町内の業者さんをお願いしました。更には図書館へ続く道の整備や草刈、木々の剪定にも協力を得ています。開館直前の蔵書整理には、子育て世代のお母さんたちが活躍しました。夏休みには地元

の中学生が職場体験に訪れます。宿題をしにやってくる中学生や、漫画(スポーツ関係の漫画)を読みに来る小学生もいます。

私たちの「思い」と地域のつながり

町の高台にある「スポーツ図書館」は、「外」から来た異質な施設ではありません。町の人々が図書館作りに参加し、自分たちの図書館として認識してくれること、そして図書館が文化拠点のひとつとして親しまれることが私たちの願いです。

そもそも、この図書館は、体育・スポーツに係る教師や研究者など、その研究仲間十数人で立ち上げたもので、自分たちがこれまで蓄積してきた蔵書や資料を保存し、有効利用したいという思いで設立されました。しかし、設立メンバーに関わったほとんどは町外の住人で、地元民は一人だけでした。こうしたメンバー構成が必然的に、私たちの「思い」と地域をどう繋げるか?という課題をもたらしたのです。スタッフの会議では、常にこのことが議論されてきました。

地域とつながる楽しいイベント

設立から5年、今私たちは「体育・スポーツと健康教育に関する専門図書館」としての役割はもちろんのこと、地域の文化拠点として様々なイベントを独自に企画し、行政や観光協会、商店組合などが行う地域づくりの取り組みに呼応し様々なイベントに参加しています。

初春の「ひなまつり茶会」や夏の「花火を見る



「スポーツ図書館」で行われた先生たちの勉強会風景



「スポーツ図書館」のイベント、W-c p展の一コマ



「つきよのコンサート」風景



クリスマスコンサートの一コマ、地元のトーンチャイムを演奏する仲間たち



ひなまつり茶会と「スポーツ図書館」からみる足助の町並み

会「秋の「つきよのコンサート」、暮れに行う「クリスマスコンサート」などは私たち独自の企画です。ささやかな企画ではありますが、四季それぞれの趣を地域の人たちと共有しています。

こうした活動が、今年度から市独自の地域活性化補助金制度（＝わくわく事業）の対象となりました。これらの活動は「スポーツ図書館」の専門性を生かし、発揮するイベントではありませんが、文化拠点のひとつとして地域の盛り上げに少しでも貢献しようとするものです。それを大切だと考えているのは、それが「スポーツ図書館」を支える土台として大きな意味を持っていると思うからです。

「スポーツ文化」の発信

スポーツを通じて地域づくりを！という取り組み事例は多くの地域や自治体で行われており、大

きな成果を上げていると聞いています。そこで行われているのはスポーツへの参加や体力づくりなど身体運動を伴うものです。いわば「スポーツの実践」といつてもいいでしょう。

私たちは「スポーツを学ぶ」ことで地域と結び、地域づくりに貢献したいと考えていますが、それだけではありません。体育・スポーツの学びの拠点として、その成果を全国に発信していきたいと考えています。その成果がすぐに地域住民に還元されることはありませんが、全国に発信できる施設がこの足助にあり、我々がそれを支えているという誇りが生まれてくると確信しています。

地元の小学生や園児たちは、ここで行われた「ミニ・体育（理論）の授業」に目を輝かせ、大人の方からも「スポーツへの見方が深まった」という声を聞くことがあります。本館で行われた研究会での成果が、授業実践として試され、大きな成果を収めているという声もいただいています。本館

の資料で卒論を書きあげた学生もいます。

これまでには「運動会展」や「サッカーワールドカップ展とシンポジウム」「64東京オリンピックの頃展」や「自転車の本展」など専門的なイベントを企画してきました。また、各種のゼミや研究会も開催され、ささやかですが、スポーツ文化の発展に寄与してきたと自負しています。

イベントや研究会への参加者には近隣の宿泊施設と提携した「スポーツ図書館ゼミパック」を利用していたいただいているのも私たちの拘りです。

これからの「スポーツ図書館」

課題は山積しています。第一はアーカイブスとして利用していただける書籍や資料の拡充と整理です。調べがいがあ、頼りになる、たのしい図書館としての機能の充実が何と言っても重要な課題です。それにはお金も人も必要です。協力して

いただける決め手は私たちの活動への理解と共感です。

創意あるイベントづくりとその拡充も大きな課題です。豊かな発想と堅実な事務処理能力が問われています。

ともかく、2010年3月、私たちは第1歩を踏み出しました。あれから5年、これからはローカルとグローバルという二足の「わらじ」を履きながら歩いていこうと思います。

持続可能な地域社会を、お酒片手に語り合う —NPO法人のサポートやイベント運営など能動的活動も—



シズオカオーケストラ代表

● 井上 泉

◆◆◆ 静岡を盛り上げたい

私が生まれ育ち、暮らしている静岡。大学生生活と就職を経験した後「一生住むのは静岡」と東京から戻ることを決意した時の決め手は、地元の様々な情景とそこに暮らす人々、シンプルに考えればその2つだったように思います。

しかし、帰ってきた頃、静岡のまちはだんだんと元気を失っているように見えました。少子化の影響で母校は閉校し、空き物件の数は増え、歴史ある中心街の映画館は取り壊しが決まるなど、失われていく情景や人々の暮らしがあることを感じながらもどこかいい気持ちが募り、何とかしたいと思っていました。

その後、静岡で開催されている地域活性化イベントやプロジェクトのスタッフをするうちに、同じ気持ちで語らえる仲間や尊敬する先輩が増え、その中の一人に「静岡でやってみたら？」と薦めていただいたのが「グリーンドリンクス」でした。

◆◆◆ 持続可能な静岡を考える プラットフォーム

グリーンドリンクスは1989年にロンドンのパブで始まった集まりです。お酒を片手に、エコやサステナビリティについて気軽に語り合う場として、その後世界400都市以上で開催される規模となりました。日本においては、グリーンドリンクス東京（このように都市の名前とセットに呼ばれます）を運営するNPO法人グリーンズの呼びかけにより、全国各地へと広がっていきました。

そして2010年12月、グリーンドリンクス静岡は「持続可能な静岡を考えるプラットフォーム」を目指してスタート。1回目は25人程の参加者と共に、静岡名物のお酒の緑茶割りで乾杯をし、静岡の地域性について語り合いました。参加者の年齢・性別・職業は全てバラバラ。初対面の人多かったのですが、テーマのある飲み会という雰囲気気が気楽だったのか大いに盛り上がったのです。



美味しいご飯とお酒で会話も弾む

社会的立場を飛び越え、腹を割ってまちのことを話すことができる「場」の可能性を感じました。

◆◆◆ 様々なテーマで参加者が語り合う

会員登録をすることも出欠を取ることもなく、好きな時に誰でも参加できるというスタイルのグリーンドリンクス静岡。その後も数カ月に1度のペースで開催を続けていくうちに、顔見知りも増え、そこでの縁がきっかけで参加者同士の新たなプロジェクトが生まれるなど、様々な化学反応を見ることができました。これも「静岡」という共通テーマを囲み、お酒を飲み交わしながら本音で話せるからこそではないでしょうか。

また「方言」「ゲストハウス」「都市計画」「ク



映画館とのコラボレーション企画も実現



テーマによってワークショップを取り入れることも



シズオカオーケストラ WEB サイト
<http://shizuoka-orchestra.com/>

これが実現していききたいことは、主に3つ。このまちに愛着を持ち、自分たちの手でもっとステキにしていくこうと考える人が増えること。対話を生むことで想像力が育まれ、平和なまちになっていくこと。そして、そんなまちや人に惹かれて静岡を訪れてくれる人が増えることです。

今はインターネットやSNSを使いすぐに繋がることが出来る時代です。仲間同士の連絡手段や企画の広報にも、もちろん大いに活用しています。しかし、やはり最後は、リアルな場での出会い対話をするのが最も大切だと考える我々にとって、グリーンドリックス静岡はとても重要な「場」。そして自分達のまちの未来について日常的に話せることは「豊かなまち」である証拠だと信じています。

これからも気張らず、しかし手を抜かず、そのプラットフォームを継続していくことが何よりの目標です。

◆◆◆
 「変えなければ」から
 「変わらなくて良い」へ

ラフトビール」「多様性」「エネルギー」など、回ごとにサブテーマを設定しゲストを迎えることで、新しい参加者が増え、参加者同士がより活発に語り合える雰囲気になることを目指してきました。これまで開催した24回の総参加者数は、累計760人。同じまちに暮らす人同士が出会い、未来について対話をする中で、私自身もたくさんさんの刺激と気づきを得られたように思います。

◆◆◆
 能動的な活動に発展

わらなくて良い」へと変化していったのです。今は、静岡が元気を失っているとは思いません。このまちは面白い。なんたつて素敵な人々がいるし、目をこらせば思わず嬉しくなるような出来事をそこら中で見つけることができるからです。

むしろそれをブラッシュアップしていくこと、その魅力を静岡に暮らす我々が自覚し、共有・発信していくことが、持続可能な静岡のために大切なのではないかと感じています。

また、5年間運営を続ける中でグリーンドリックスの枠を超えた動きも出てきました。NPO法人のサポートや地元を舞台にしたドキュメンタリー映画の広報、イベント運営や他団体とのコラ

ボレーション企画など、より能動的な活動へと発展していったのです。現在はそれらも含めて「シズオカオーケストラ」というプロジェクトに集約し、その一つの柱としてグリーンドリックス静岡を運営しています。ひとりで始めた活動でしたが、これまで開催する中で出会った仲間達と共に運営するようになったことで、より幅広くたくさんの方々に興味を持っていただけるようになりました。

我々が実現していききたいことは、主に3つ。このまちに愛着を持ち、自分たちの手でもっとステキにしていくこうと考える人が増えること。対話を生むことで想像力が育まれ、平和なまちになっていくこと。そして、そんなまちや人に惹かれて静岡を訪れてくれる人が増えることです。

今はインターネットやSNSを使いすぐに繋がることが出来る時代です。仲間同士の連絡手段や企画の広報にも、もちろん大いに活用しています。しかし、やはり最後は、リアルな場での出会い対話をするのが最も大切だと考える我々にとって、グリーンドリックス静岡はとても重要な「場」。そして自分達のまちの未来について日常的に話せることは「豊かなまち」である証拠だと信じています。

これからも気張らず、しかし手を抜かず、そのプラットフォームを継続していくことが何よりの目標です。

——本の読み手同士がつながるまちライブ러리——

岡本商店街とは

神戸市の東端に位置する岡本商店街は300メートル四方に275店舗(2015年12月現在)の店舗が立ち並ぶ兵庫県最大の商店街である。阪急神戸線岡本駅とＪＲ神戸線摂津本山駅に挟まれており、大阪と神戸の間で阪急とＪＲがもつとも隣接しており、両沿線への乗り換え客も多い。周辺には甲南大学、甲南女子大学、神戸薬科大学や創立100年以上の小学校などがあり、文教地区としても人氣を集めている。通常商店街といえば1本のアーケード通りが想起されるが、岡本商店街は面で広がっており、大正時代からの細い道が現存しており「角を曲がればその先にまた店がある」という探検的要素もあり、ジェイン・ジェイコブズの言う「4つの良い街の条件」が揃っている街である。

街から図書館がなくなる

1974年に商店街内に開設された東灘図書館であるが、貸し出し利用の伸び率は高かったものの、手狭なとバリアフリー対応でないために、

2013年に隣駅に移転することになった。商店街としては、図書館に来ていた年間20万人の来街者が減少するのは痛手であるが、反対運動をしてもどうにかなるものでもないと判断し、出来ることをしようと考えた。かといって、図書館の代わりを作るのは現実的でなく、どうしたものかと日々考えていた。

まちライブラリーとの出会い

街の窮状をいろんなところで訴えていたら、東日本大震災復興支援の取材で知り合った産経新聞の記者が「こんなおもしろいことを考えている人がいるから一度会いませんか?」と電話をかけてきた。会ってみると、まちライブラリー提唱者の磯井純充先生という、本を愛するなんとも魅力的な人物で、一気に説明に引き込まれてしまった。

まちライブラリーとは

少々岡本にあう形にカスタマイズするだけで街の課題を解決すると、確信をもった。

最初は空っぽの本棚があり、本に対する思いを書き込んだカードを添えて本を寄贈する。読む人は、本の作者でなく寄贈した人の思いと通じあうことが可能である。本というものは作者と読み手の行き来であつたのが、まちライブラリーでは、



7/20 第2回 植本祭

10/20 第3回 植本祭

みんなの本を持ち寄って、商店街のお店に本をばいりこく(寄贈する)「植本祭」(しょくほんさい)を開催します！
 1ヶ月の本まつりにつき、数回のお店とつながりますよ！

こんな感じです。

13:00 受付開始(文庫本～e本)

13:30 まちライブラリーとまちまちはんたーショップ

14:30 ばいりこく！1時間

※当日は午前9時から午後5時まで営業して開催

15:30 お昼ごはん！2時間

※当日は3時以降の営業につきまじり開催

16:30 ばいりこく！2時間

この日 19:30より予定に定、お祝いイベントあり

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち



岡本まちライブラリー

MACHI LIBRARY

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

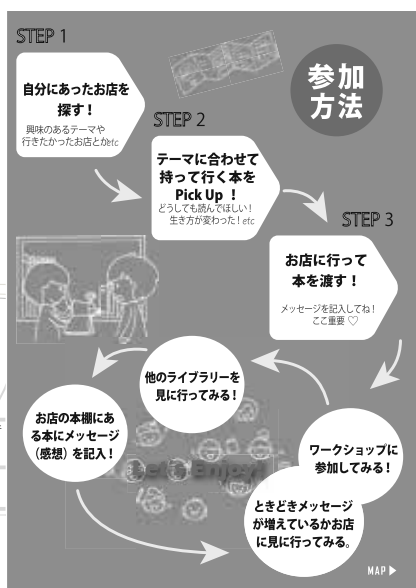
● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち

● 町なかみち





いしころカフェ



ひつじ茶房

読み手同士のつながりが生まれ、しかも一対一でなく無限のつながりの可能性がある。

◆◆◆ 商店街全体が図書館、店ごとにテーマ

磯井先生のお話を聞き、岡本商店街で考えたのは、街全体に小さな本棚があり、それが集まって大きな図書館になるというイメージだ。図書館の書架の列に「旅行関係」とか「文学」などと見出しがあるように、岡本商店街の店ごとにテーマが掲げられており、その店に行けばその「テーマ」の分類の本があり、愛好家と出会ったり本を通じて話し合ったりできるということだ。「村上春樹」のテーマの店では、その愛好家同士が出会い、共

通の趣味を持つ者同士がつながる、という風に。

◆◆◆ お店紹介

店名：いしころカフェ

岡本商店街で女子が好きなカフェと言えば知らない人はいないというくらい可愛い内装やカフェメニューが充実している「いしころカフェ」。そんな「いしころカフェ」の店内に設置されているのが「いしころ図書館」というまちライブラリー。テーマを「旅」で揃えたこのお店の本にはオーナーが持ち込んだ絵本を始め、食、自然、美容など「旅」というテーマから派生する様々な本が小さな本棚に可愛く揃えられている。

女性オーナーがほっこり落ち着くお店の雰囲気、まちライブラリーの本を手取るお客様であふれかえる。

店名：神戸・岡本 Cozy Cafe(「ジーカフェ」)

阪急岡本駅から降りてすぐ、マンションの1階に佇むカフェ「ジーカフェ」はベビーカーで来られる方のために段差のないスロープ、おむつ替え台の設置、プレイルームの設備や離乳食の提供など、小さなお子様を持つ親御さんでも安心して本をゆったり読める環境を作っているお店。テーマは「村上春樹」。お店のオーナーが好きな作家でオーナーも自ら村上春樹の作品をまちライブラリーに提供している。阪急岡本駅を降りてすぐの立地条件に「村上春樹」というテーマを備えたお店でお食事はお店の名前の通り、「糀(こうじ)」を使った料理を提供しているので健康的な食事をとりながら「村上春樹ワールド」にどっぷり浸かれるお店だ。

店名：「ひつじ茶房」

テーマが「絵本」とあるように、実はこのお店の女性オーナーのお父さんは童話作家。なので、もともと沢山ある絵本の本棚に「まちらいぶらりー@ひつじ茶房」のコーナーが併設されている。店内はヨーロッパのお家に来たような雰囲気です。ファア二段ベッドがありアットホームで隠れ家のようなカフェなので知る人ぞ知る隠れた名店として女子大生から地域に住むおじいさんなど、いろんな人がお店で本を読んでゆつくりとした時間を過ごしている。2015年9月より岡本の裏通りのマンションの2階に可愛い猫と共に移転オープンしている。

商店街の空き店舗を新たな居場所、多様な交流拠点に ―明治期の発展を支えた近代化遺産を活用―



伊予市地域おこし協力隊

● 新居田 真美

商人のまち、伊予市郡中^{ぐんちゅう}

愛媛県伊予市の郡中地区は、江戸時代前期に商人が商いの地として開発し、江戸時代後期に港を築き、流通拠点として繁栄しました。暮らしに必要な機能が集積していることから、歩いて暮らせる「まち暮らし」を提案しています。

商店街の空き店舗を交流の場に

江戸時代の町家が残る郡中で、異彩を放つユニークな建物が、1911年（明治44年）に建設された旧伊予農業銀行郡中支店。西洋文化を取り入れた時代に応えた地元の大工の心意気が伝わる、疑洋風建築です。当初は銀行として農業の発展や伊予絣産業を支え、その後も、金融機関としてこのまちと共に歩んできた建物でしたが、2013年4月から空き店舗となっていました。そこで、ここを活用するために、2013年12

月から、商店街の方や住民、まちづくり関係者などをメンバーとする検討委員会を設け、その活用策を検討。その内容を踏まえて、2014年5月1日に、「郡中まち元氣サロン来良夢^{こらむ}」として、オープンしました。個人所有となっている建物を、株式会社まちづくり郡中が借り上げ、住民によるまちづくり団体「郡中まち元氣推進協議会」によって運営されることになりました。

若手アーティストの発表や様々な活動の場に

まずは、商店街の3代目、4代目でもある2人のアーティストの作品展を開催。「はっぴー展」と題した展示会には、幅広い世代が訪れ、建物にも触れていただきました。その後も、書や子どもたちの作品の展示など、発表の場として利用されています。

その他にも、多種多様な催しが繰り返され、コミュニティづくりにつながるイベ

ントも行われるなど、映画や本などの趣味のコミュニティが広がりつつあります。子育て世代のサークル「mama cafe はじめのいっぽう」の「おやこひろば」は、子育てやハンドメイド情報の交換など、母親同士の交流の時間となっています。古い建物で広すぎず、子どもから目を離さない距離感でお喋りができて良いそうです。親子連れが歩く商店街にしたいという主催の方の想いが現実になりました。

商店街で買い物をして持ち寄る「郡中もちよりBar」では、来良夢を掃除しているメンバー「たてものがかり」や地域や行政の方、地域外のユニークな活動をしている方、大学生などが訪れ、異業種交流の場や温めている企画発表の場となり、いくつか実現されました。また、商店街に関心を持つきっかけにもなりました。

郡中の歴史や建築を考える場ともなっています。郡中の古い写真の展示や、ドキュメンタリー映画「まちや紳士録」の上映を行い、古建築の魅力の再発見につながりました。「伊予かすり展」では、えひめ織りの伝統工芸士の機織りの実演や、



「郡中まち元氣サロン来良夢」のオープニングセレモニーの様子



伊予かすり展では、愛媛県立伊予農業高等学校生活科学科被服班の生徒がかすり巾着をつくって販売。伝統工芸士の方に、織りの手ほどきも受けた



愛媛県立伊予農業高等学校による、伊予市の特産品を使ったスイーツ開発の試食会



カレー付き上映会終了の様子。若い力が集結した

愛媛県立伊予農業高等学校の学生の作品展示や販売を行い、愛媛の伝統工芸伊予紉の普及活動の場となりました。

その他にも趣味の教室として（ジャンベ、プリザーブドフラワー、アイシングクッキー、句会など）、学びの場として（お米屋さんの健康講座、企業創出検討会議など）利用されています。100円商店街など、商店街のイベント時には、コミュニティカフェ来良夢を開き、休憩所として利用していただいています。

◆◆◆ 出会いがつながり、新たな動きに

これらの様々な活動が、これまで商店街には縁がなかった多種多様な人々をまちに呼び込むことになりました。催しに積極的に参加して応援する女性グループ「キヨロキヨロ隊」も足を運んでくれるようになりました。

さらに、これらの人々が、まちを元気にしたいという想いでつながり、新しい動きが起こり始めました。その一つが、2015年8月に開催された『上映会「聖者たちの食卓」+カレーキャラバン@伊予』。来良夢の斜め前の駐車場を借りた、一夜限りのカレーつき屋外上映会でした。来良夢映画くらぶのメンバーが中心となって運営し、ジャンベ教室の先生がジャンベやアフリカンダンスを披露し、キヨロキヨロ隊など女性陣がカレーを調理。愛媛大学法文学部総合政策学科佐藤亮子

ゼミの学生がボランティアで、当日の設営から運営まで協力してくれました。商店街の一角で行った、予算のない手づくりのイベントにも関わらず、子どもからお年寄りまで100人ほどの人が集まり、真夏の夜の賑わいとなりました。

◆◆◆ 誰にでも居場所がある、やさしいまちに

来良夢がオープンして、1年半以上経ちますが、今後は、もっと地域の人たちが関わって運営が継続できる仕組みにする予定です。そうなれば、もっと主体的に関わる人が増え、その輪が広がれば、来良夢を建設当初の姿に復活させることも夢ではなくなります。

最近も、新たな芽が育ち始めています。伊予市への移住者が英語を教える「English hover coffee」。子どもから大人まで、英語をきっかけに新たなコミュニティができてつたり、移住者の活躍の場ともなっています。また、当たり前前にできていたことが不自由になっても、このまちで暮らしていけるよう、人にやさしいまちづくりを目指す、「おれんじサロンこらむ」も始まりました。まずは、介護関係の方や関心の高い層に来ていただき、ゆくゆくは、認知症や不自由さを抱える方も安心して集える場に発展させたいと回を重ねています。

場は、あくまでも場であり、そこに人が入り、想いを共有してつながり、小さなことでも実践を続けることで、確実に変化や活力が生まれています。今もそうした小さな芽が、来良夢で育ちつつあり、新たな商いなどへの発展が期待されます。

生涯学習の場としての図書館

―「市民との協働」で20年―



伊万里市民図書館係長

● 末次 健太郎

伊万里市民図書館が開館したのは、平成7年7月7日、7が3つ並ぶ覚えやすい日であった。延床面積は4千平方メートルを超えているが、建物のほとんどが平屋建てで、人口約5万7千人の地方都市にしては規模の大きな図書館である。図書館と集会室のエリアを兼ね備えており、生涯学習の拠点

と位置づけられている。平成26年度は40都道府県から227件、1158人もの視察者が訪れ、全国から注目を集める図書館となっている。

「滞在型図書館」の誕生



伊万里市民図書館の外観



2階から見下ろした1階部分。書庫の部分のみが3階建て

図書館エリアの特徴として、基本設計の段階でこれからの高齢社会を見据えて、ゆつくりとくつろげる「滞在型図書館」として設計されている。開架室には高齢者や車いすの方でも手が届く145センチの低い書棚が並び、その間には座席が埋め込まれている。窓口は当時主流

であったカウンター方式を改め、役割毎に分かれたデスク方式を採用。机を低くすることで職員と来館者との敷居を下げている。さらに、窓口を4カ所に分散させて、それぞれに本の専門知識を持った司書を常駐させている。建物も独特の形で、開架室の中央に立っている大きな木は大人向けの書架と児童コーナーを区切っている。やきものを焼くための登り窯をモチーフとしたおはなしの部屋もあり、大人向けには書齋をイメージした読書席、中高生向けのコーナーにはグループ学習席なども備えており、目的や気分によって来館者自身

が滞在する場所を変えることができる。加えて、集会室エリアにはボランティアなど市民グループが利用できる創作室や会議室などがあり、作業や会議などの活動を定期的に行っている。さらに、創作活動や練習の成果を発表するための展示コーナーや多目的なホールを有している。公民館や文化ホールとの複合施設と異なり、館内全ての施設を直接図書館が管理することで、多様な活動への展開が可能となっている。

この図書館で働く常駐のスタッフは18人。図書館の規模や窓口の数に比べるとスタッフの人数は少ないが、図書館ボランティアとの協働によって、様々なイベントや事業に取り組み、人数以上の働きを見せて毎日の運営を行っている。

市民との協働

図書館建設の折に中心的な活動を続けてきた市民団体『図書館づくりをすすめる会』が、新図書館の開館に伴い、発展的解消を経て『図書館フレ

ンズいまり」として平成7年9月に発足。図書館を支援する団体、いわゆる「友の会」として活動を開始した「市民との協働」の始まりである。現在は50代から70代の方たちが中心となり、自分達の図書館を良くしていきたいという気持ちで活気に満ちあふれている。環境整備などのボランティアだけでなく、独自に開催しているイベントも多い。古本市は祝日開館やイベントに合わせて年4回開催。「俳句まつり」では、大人の方だけでなく市内の小・中・高校にも呼びかけ、毎年2千句以上を集めている。正月には子ども達を集めての新春かるた会を開催し、2月には起工式を記念した「図書館めばえの日」のぜんざい会がある。この日は毎年無料で300杯のぜんざいを来館者に振る舞っている。また、今年度は図書館と共に20周年を迎えたことから、記念事業として映画『じんじん』の上映会を行い、その益金で図書館に絵本を100冊寄贈されている。

当初から自立・自活した運営を行い、図書館や行政からの助成金を当てにするのではなく、資金を自分達でまかなながら活動が続けている。資金を生み出す秘訣は会員の多さとその手法にある。現在の会員は約400人で、1千円の年会費には「直接の活動はできないが、資金面で図書館を支援したい」という会員達の気持ちも込められている。また、古本市の開館やグッズ販売に加え、図書館内に設置されている自動販売機の利益も収入源となっている。これらの活動に集うメンバーは、元々ボランティアとして活動していた経験者だけでなく、知人・友人に誘われ方や、図書館でよく本を借りていたことから、たまたま活動

を知って協力するようになった方もいる。活動への関わり方も自分のできる範囲での協力という点が共感を得られているようである。

生涯学習の場として

毎年、開館日である7月7日前後の週末に開催する「図書館☆(ほし)まつり」。これには20を超えるグループや団体、施設が参画し、図書館の誕生日を祝うイベントとして定着している。音楽の演奏や物販の出店など、自分達の活動を行いながらスタッフとして協力し、☆まつりを盛り上げている。

また、趣味のサークル、俳句・短歌の教室、図書館専属合唱団の練習なども行われている。サロンのように毎日将棋を指しに来ている高齢者なども十数名見かける。このようにボランティアだけでなく、幅広

く住民が集まる集会所エリアでは、活動に参加することで自らの生活を豊かにしたり、その成果を発表するなど生涯学習の場を提供している。図書館建設時の計画が、20年の



「図書館フレンズいまり」による図書館☆(ほし)まつりでの古本市



ホールでのおはなし会。読み語りボランティア「おはなしキャラバン」が練習の成果を発表

間で住民によって見事に実現されることとなった。

若い世代への継承が課題

どの活動でもメンバーの高齢化が進み、若い世代への継承が課題となっている。地味な活動であっても、発表の機会を増やすことや、広報によるPRなどで仲間を増やしていくことが必要である。また、「人と本をつなぐ」役割だけでなく、「人と人を結びつける」ような「つながらる図書館」を目指して、図書館の職員も学び、成長していかなければならない。

図書館建設時に掲げたスローガン、「伊万里をつくり 市民とともにぞだつ 市民の図書館」を守り続け、これからも住民と共に図書館の歴史を綴っていききたいと願っている。

本を通じて人とつながる地域交流拠点

―お寺、大学、商店街など様々な場でまちライブラリ―



まちライブラリ―提唱者、森記念財団普及啓発部長

・磯井 純充

はじめに

私が「まちライブラリ―」という本で人とつながる交流図書館を提唱し、実行しはじめたのが2011年であり、現在では全国で250カ所を超えるまでに広がっている。それぞれのまちライブラリ―は、多様な場所や運営形態をしている。その活動の軌跡をたどりながら、なぜこのような活動が地域に広がるのか、そして今後このようなマイクロ・ライブラリ―（小さな私設図書館）は地域にどのような影響をもたらすのかなどについて解説したいと思う。

まちライブラリ―とは

まちライブラリ―とは、本を寄贈しあい、それを交換する中で、本を通じて人と出会うことを主眼とした活動である。このような方式で本を集める場所をまちライブラリ―と称し、まちのあちこ

ちに点在させながら人と人が出会う場を形成しようとしている。カフェ、ギャラリー、自宅、オフィス、お寺や病院、大学や商業施設、さらには公園や山の中にも点在している。本を寄贈する時に、メッセージを記載し、次にその本を読んだ人がメッセージを返すことができるように折り込み式カードを添付している場合もある。また各々の場所では、本を持ち寄り、お互いに学びあう小さな寄合も活発に行われているところもある。

まちライブラリ―誕生の背景

まちライブラリ―が誕生した背景には、私が森ビルの中で企画、立案し、実行してきた教育事業での成功と失敗がある。私は、1987年、森ビルの創業者が始めた小さな私塾「アーク都市塾」から、2003年に六本木ヒルズに誕生した六本木アカデミーヒルズまで担当してきた。六本木アカデミーヒルズは、国際会議などに利用するカンファレンス施設と会員制の図書館を併設した施設



IS まちライブラリ― 『本とバルの日』

で、その会員は約3000人。会員は、勉学や仕事のスペースとして利用したり、各種セミナーに参加したりしている。このように事業的には成功した活動であったが、施設の大きさから利用者と運営者との距離が離れ、お互いの顔が見えにくくなってしまった。小さな私塾で活動していたころは、参加者と一緒に新しい学びの場を作ろうとしていたが、六本木アカデミーヒルズでは利用者が増えたにも関わらず、人と深くつながることが少なくなつたのである。地域の中で地元の人が経営する店舗がなくなり、チェーン店などに代わる中で人とのつながりが薄れるのと同じことだ。その中であっていかに個人の個性を活かし、個人の立ち位置で立ち上げられ、楽しく交流できる、本を絡めた活動ができないかと考えたのがまちライブラリ―である。

まちライブブラリーの誕生期

まちライブブラリーの活動を構想し、模索を始めたのは2011年である。特に注目されるのは、大阪市中央区に誕生したI・Sまちライブブラリーで、小さなオフィスビルの一室に誕生した。そこで、数人の発起人と構想を練り上げ、杉の木を参加者自ら切り、ワークショップ形式で四角い箱を多数制作し、その上に板をのせるだけの簡単な本箱を作った。こうした、ビルの一室での活動は、知れ渡るのに時間を要した。そこで「本とバルの日」という「本」を持ち寄り、紹介しあい、お互いの得意な分野や興味のある話題を提供しあい、最後に手作りの料理を持ちあうイベントを毎



陽運寺まちライブブラリー

月実施した。このイベントを通して、多様な人が参加するきっかけともなり、多くの寄贈本も集まることになった。4年近い活動を通じて現在では4500冊を超える本が寄贈され、またサポーターといわれるメンバーも生まれて、お互いに企画をしながら運営を続けている。

まちライブブラリーの多様な場所での展開

前項に紹介したI・Sまちライブブラリーの活動と並行しながら数々の場所での展開を試みてきた。以下にその事例を紹介したい。

事例1…店舗、商店街等との連携

東京都台東区入谷のカフェやゲストハウス、墨



藤田歯科まちライブブラリー

田区東向島の珈琲店や新宿区の音楽カフェ、大阪市北区のカフェや枚方市の珈琲店にも設置している。これらのカフェは個人経営のものが多く、それぞれ思い入れのある運営をしており、集める本にこだわっているところもある。神戸市東灘区では、岡本商店街と連携し22の店舗が別々のテーマの本を集め、利用者が商店街を回遊するイベントも実施している。

事例2…宗教施設等との連携

東京都新宿区四谷三丁目にあるお岩さん信仰で有名な陽運寺という小さなお寺には、副住職が作ったまちライブブラリーがある。ここでは、毎月開かれる祈願祭という行事に集まる参拝者や副住職とご家族が持ち寄った本が集まり、交換されている。参拝者は比較的若く、30代から40代くらいの方が中心で、女性も多い。このお寺が練馬区に運営するガーデン型の墓苑にもまちライブブラリーが誕生し、大阪市中央区の圓周寺というお寺にも設置されている。

事例3…病院・診療所等との連携

埼玉県越谷市の北越谷駅前にある藤田歯科医院は、歯科医師やスタッフが30人近くいる大型の歯科医院だ。院内には大きな本棚に囲まれた待合室と交流スペースがある。訪れた人は、これらの本を閲覧したり、借りたりすることもできる。また交流スペースでは、各種イベントも実施しており、落語会や音楽会、絵本の読み聞かせ、カクテル講座など、多様なイベントが実施されている。大阪府守口市にある関西医科大学附属滝井病院に

は、大型の透析センターに併設されたまちライブラリーがある。似顔絵付きの推薦本コーナーもあり、院内スタッフと患者との距離感を近くする工夫もされている。

事例4…公共施設との連携

公共図書館や社会福祉関係の施設にもまちライブラリーが誕生している。兵庫県伊丹市の公共図書館ことば蔵では、利用者自らが持ち寄った本にメッセージを付けて交換している。館内のロビー部分に専用の本棚も設置されており、蔵書は図書館の本とは分離されている。逆に、岐阜市中央図書館では、図書館内の本に利用者がメッセージを付けて、専用のコーナーに置きながら、貸し出しを行っている。また大阪市の社会福祉協議会では、



奥多摩 IS まちライブラリー

施設内にまちライブラリーを設置し、ボランティアが集まって本を持ち寄り交換している。このような公共施設でも市民と連携しながらまちライブラリーが設置されている。

事例5…山・公園・まち角の中

東京都奥多摩町鳩ノ巣駅前には、民家の離れを利用したまちライブラリーがあり、山や溪谷地に行き、自然の中で読書をして、バーベキューなどを楽しむ会をやっている。都心で生活する人の憩いの場となっている。

公園に随時現れる本棚のないまちライブラリーも誕生している。大阪府阪南市の公園を舞台に、近所の主婦がはじめた「ガラスまちライブラリー」である。公園にピクニックシートを敷き、お弁当



まちライブラリー@大阪府立大学「植本祭」

と本を持ち寄り、ゆったりとした雰囲気では紹介しあって、本の貸し借りをしている。

さらには、巣箱のような形の本箱を自宅や店舗の前に置いて本を自由に貸出しているところも現れている。元々、米国で始まった「Little Free Library」の創設者と私が出会って日本でも始めたものである。木で作られた箱に本を20冊程度入れて、貸し出しノートを付けるだけで通り行く人が借りていくのである。

蔵書ゼロ冊からの図書館

規模の点からも、またその仕組みの斬新さからも多くの注目を集めたのが、まちライブラリー@大阪府立大学である。まちライブラリー@大阪府立大学は、2013年4月、大阪市浪速区に開設した大阪府立大学のサテライトキャンパス「Isite」ななば（約2000平方メートル）に設置された。館内の本棚は大学側で設置し、配架する本は原則、まちライブラリーの利用者が持ち寄って集めることとなり、「蔵書ゼロ冊からの図書館」と謳っている。

まちライブラリー@大阪府立大学の開設に際して「植本祭（しょくほんさい）」というイベントを実施した。これは、本を持ち寄り、本棚を埋めていこうという意味で、植樹祭をもじったものである。2日間にわたり48のワークショップを企画し、それぞれのワークショップの参加者が本を持ち寄り、本を紹介し、決められた本棚に配架するイベントが行われた。館内のあらゆるコーナーで同時にワークショップが実施され、2日間で延べ

500人の参加者が集まり、相当数の本が寄贈された。その後もこの「植本祭」方式が継承され、利用者登録した人（会員）は、各自小規模なイベント（参加者が10人前後のもの）を随時実施することができる。月平均10〜20くらいの小規模なイベントが実施され、今も蔵書が集まっている。このような方式により、利用者が主体的に施設利用をし、頻度の高い来訪が生まれ、利用者間の人間関係構築を図っている。このような自主的な利用が幸いし、比較的大きな施設ながら専任のスタッフ1人で運用している。ちなみに2015年9月末時点で、登録された登録利用者（会員）は、約1200人で蔵書数は8800冊になる。実施されたイベントは、開館以来約580回になる。

大型商業施設での展開

2015年4月、まちライブラリー@もりのみやキューズモールという地域の拠点となるまちライブラリーが誕生した。面積は、約240平方メートルとまちライブラリー@大阪府立大学とほぼ同程度の規模であるが、その中にカフェやFMラジオのサテライト、子ども達が自由に本に触れ、読めるキッズコーナーを併設している。当該商業施設は、大阪城公園の南に位置し、かつてこの地にあった日生球場の跡地という大阪市民に親しまれた場所でもあり、地域連携を重視し、まちライブラリーを設置したのである。

蔵書に関しては、開館前の篤志家の寄贈、並びに開館時の「植本祭」にて3200冊ほど寄贈を受け付け、その後も日々、寄贈が増え、11月末現在で約7600冊の蔵書になった。貸し出しも開館以来順調に伸びており、一日平均20〜30冊程度の貸し出しがある。当該施設の利用者は、休日で約600人、平日で約300人が利用する施設になっている。2015年11月現在で延べ利用者数は11万人を超える。館外貸出には、会員登録を必要があるが、その数も約1200人にのぼる。会員登録者の80%近くが、当該施設から2キロから3キロ圏内に居住している。

もりのみやキューズモールは、その企画段階から市民サポーターによる企画、運営会議を行い、施設設置者が一方的なサービスをするのではなく、あくまでも施設の一部を開放しながら、日々の運営やイベント等の活動については広く市民グループに委ねる形をとることににより、より深い関係性を築けた。これら参加型の運営が市民との関係性をより深くしていくものと考ええる。

本による広域的な地域連携

全国で250カ所を超えるまちライブラリーのうち大阪を中心に近畿圏のまちライブラリーは、120カ所以上ある。このような状況を踏まえて、「まちライブラリー大阪ブックフェスタ+2015」をやることにした。これは、大阪、兵庫、奈良、京都各地のまちライブラリーと公共図書館、書店が、垣根を越えて本をテーマにしたイベントを実施しようというものである。全体のテーマは、「本と人と出会い、まちに出よう」として、2015年4月18日から1カ月間にわたり、94のまちライブラリー他私設図書館、大阪府立、大阪

市立など35の公共図書館、10の書店など、140カ所のブックスポットで277のイベントを実施した。参加人数は、5300人を超えているが、その多くが友人の紹介（25%）やSNS（24%）と口コミを中心に集まってきた。このように、草の根型のイベントが、広域な規模で、また官民の枠を越えて広く活動できたことは、「本」が誰もが当事者として参加しやすい地域の活動を促進しうると考える。

まちライブラリーは地域社会の絆を醸成

以上、まちライブラリーを中心に記述してきたが、実に多様な形の私設図書館が、全国あちこちに広がりつつある。このような形で広がる背景には、個人の力でも自由に本を集め、貸し出し、人となつながら場づくりができる楽しさを多くの人が気づき始めているからであろう。特に、人とつながることを求める時代において、まちライブラリーは今後さらに増えるものと思われる。また、まちライブラリーは、地域社会における信頼、互酬性、絆による社会関係資本を醸成する可能性を秘めている。このような社会関係資本を豊かにできれば、「老・壮・青」が地域に集い、地域の課題に挑戦し、人のつながりが薄くなった時代に、個人の顔が見える社会が誕生しうると私は確信している。行政や企業に頼るのではなく、個人個人が小さな役割でも、活き活きと地域社会の中でやりたいことをやりながら、その活動の連担が、大きな社会的役割を担える時代がくることを希求して、私の今後の活動展望としたい。

学校経営と地域づくりの一体化

「コミュニティ・スクールの推進による地方創生」

山口大学教育学部教授 ● 霜川 正幸

地域活性化センターでは、地方創生の担い手となる人材の養成を目的としたワークショップ「地方創生実践塾」を実施している。11月11日(水)～13日(金)に山口県光市で開催された実践塾の内容について、主任講師の霜川正幸氏にご報告いただいた。

(地域支援課)

光市から発信する意味

現在、地方自治体の多くは、人口の減少、産業の衰退やコミュニティの機能低下等の課題を抱えている。地方の弱体化が国全体の成長鈍化をもたらすことは論を俟たない。待ったなしの地方創生が求められている。

地方創生の主体は「人」であり、取り組みの多くは次代を担う「子どもたち」に託されることを忘れてはならない。故郷に誇りと愛着を持ち、「志」を立て地方創生に生きる人材育成が求められ、学校・家庭・社会教育の果たす役割は極めて大きい。

こうした中、各地の学校ではコミュニティ・スクール(学校運営協

議会制度、以下「CS」化の動きが加速している。平成27年4月現在、全国で2389校がCSに指定され、学校・家庭・地域社会の協働による学校運営や地域と一体となった教育活動を展開している。中でも、山口県は公立小中学校の93・1%がCSとなり、その指定率の高さ、組織体制や活動内容のレベル等から全国的評価も高い。

今回の実践塾の舞台である光市では、平成23年度の浅江中を皮切りに全ての市立小中学校がCSに指定されている。「いつ行っても地域の誰かが学校で何かをしている」「子どもや先生たちが地域に元気を振りまいている」と言われ、学校と地域の一体感、学校運営と地域づくりの連

動性が強く感じられる所である。今回の実践塾は、光市の創造的・先進的な実践に学びながら、地方創生における教育の意義と役割、学校教育の方向と学校改革のあり方、地域づくりとCSの可能性等について、各地の「志」あふれる仲間たちと意見を交え、考えを深めて、それを全国に発信する内容とした。

1日目：地方創生と教育を考える 講義・パネルディスカッション・プレゼンテーション

市川熙光市長の開講挨拶の後、光市企画調整課により「光市における地方創生の取り組み」が報告された。市政概要、地方創生施策、市民力育成と地域自治実現に向けた取り組み等が画像・映像と共に示され「人も、自然も、まちも光輝くまち」を実現した。

次に、北海道大学学務部長の出口寿久氏による講演「CSの推進による地域再生」が行われた。文部科学省において学校支援地域本部事業やCSの制度設計、普及啓発を中核的に担った出口氏の、CS導入の背景、現状と課題、学校を核とした地方創生のあり方等についての講演は説得力が極めて高く、地方創生における教育の意義、役割等に関する貴重な学びとなった。

続いて、浅江中CSに構想段階から参画する光市コミュニティ・スクールコンダクターの本本育夫氏、



地域の技術者が指導にあたる「あさなえ木工教室」を見学

浅江中学校区統括コーディネーターの金子功一氏に出口寿久氏と霜川が加わり、CSの実効性と課題に関するパネルディスカッションが行われた。校長として関与した本本氏は、学校教育活動と地域活性化事業をつなぐ意味、取り組みの具体と生徒の変容、教職員の意識改革の重要性を、地域づくり実践者として参画した金子氏は、学校との協働に対する地域の期待感、地域の変化と行政支援の大切さ等をそれぞれ語り、以後の研修の充実深化につながった。また、浅江中卒業生(教員志望学生)が自らのキャリア設計の源となった地域ぐるみの教育の魅力を話し、CSを活かした人材育成の実例を聞いた。

その後、光市教育委員会学校教育課長の石丸義臣氏は、講義「光市におけるCSの推進」の中で、教育委員会とのリーダーシップ、現状と課題、学校運営の質や教員の資質能力の向上、学校の活性化と地域への広がり

を成果として報告した。特に、児童



地域の皆さんとの意見交換会



グループワークの様子

2日目：コミュニティ・スクールの魅力を体感する フィールドワーク①②・ワークシヨップ①

フィールドワーク①では、市内5

生徒の自己肯定感、チャレンジ精神、地域行事や地域貢献への意識が飛躍的に向上したとの報告は、CSが学校と地域の双方にとってよい関係を創り出す可能性を示したものととして特筆できる。

浅江中学校長の伊藤幸子氏、浅江中学校生徒代表と校外コーディネーターの末岡誠氏と3年生による発表「つながり日本一をめざして」では、「地域に支えられ地域に感謝」「15歳は地域の担い手」「人、つながりが郷土愛を育む」等、生徒が発する正直で力強い言葉に、生徒の成長やCSの可能性を確認した時間となった。

中学校CSの実践発表が行われ、CSの形、推進組織、情報発信や地域教育力との連動等について比較研究を行った。「ポスターセッション」では、終了時間が来ても意見交換や交流が途絶えないブースが多く、印象に残った。

フィールドワーク②では、全員が浅江中を訪問し、地域人材を活用した授業、学校と地域の協働による実践、外国語指導助手による住民対象の英会話教室等を見学し、現場の實情にふれた。学校支援に参加した住民との交流会では、住民の生の声からCSの実効性を感じた。

後半はワークシヨップ①が行われた。今回の実践塾は、CSと地方創生に関する基礎的理解、先進事例を通じた実践研究、各地での動きの創出とリーダー養成に資するワークシヨップで構成されている。このうちワークシヨップは、対象や内容から、拡散（実践交流）型ではなく開発（力量形成）型が望ましいと考えていた。ここでは、架空の中学校長として、CSの設計、行政・教育課題の融

合を意識したプログラム編成を課題にすることとし、この時間は「情報収集」のワークを行った。

3日目：学校経営と地域づくりを構想する ワークシヨップ・総括講義

この日は「構想」と「編成」のワークが行われ、市長の立場（行政課題）と校長の立場（教育課題）に分かれて活発な協議や発表が展開された。各地の今後を思いながら、「自分の町でも早速このワークを実施して動

きを創る」という声も聞かれた。

昨今、「地域の拠点としての学校」の姿がクローズアップされている。学校を拠点としたコミュニティや人の存在が、地域の結束力や元気、安全安心を創出し、学校と地域の協働は地域そのものを活性化させる。地方創生に教育の視点からアプローチすることの意義と可能性を今回の実践塾は教えてくれた。今後の学校経営と地域づくりの一体化、CSの推進による地方創生を参加者全員で誓い、3日間の全日程を終了した。

地方創生実践塾（山口県光市）の概要

第1日目 11月11日（水）

光市の紹介（光市企画調整課）

講義① 基調講演「コミュニティ・スクールの推進による地域再生」

特別講師 北海道大学学務部長 出口 寿久 氏

講義② パネルディスカッション

コーディネーター 山口大学教育学部教授 霜川 正幸 氏

パネリスト 北海道大学学務部長 出口 寿久 氏

光市コミュニティ・スクールコンダクター 木本 育夫 氏

浅江中学校区統括コーディネーター 金子 功一 氏

講義③ 「光市の取り組み」

講師 光市教育委員会学校教育課長 石丸 義臣 氏

講義④ 「浅江中学校の取り組み」

講師 浅江中学校生徒代表及び同校校外コーディネーター 末岡 誠 氏

浅江中学校長 伊藤 幸子 氏

第2日目 11月12日（木）

フィールドワーク① 5 校区代表者による発表及びポスターセッション

講師	室積中学校	教頭	井上 春樹 氏
		教諭	植野 史理 氏
	光井中学校	教頭	安田 尚弘 氏
		教諭	平本 信雄 氏
	浅江中学校	教諭	藤田 猛 氏
		教諭	宮内 秀一郎 氏
	島田中学校	教頭	内山 昭博 氏
		教諭	中原 雅史 氏
	大和中学校	教頭	中村 英樹 氏
		教諭	今元 裕次郎 氏

フィールドワーク② 浅江中学校訪問

ワークシヨップ① グループ討議

主任講師 山口大学教育学部教授 霜川 正幸 氏

第3日目 11月13日（金）

ワークシヨップ② グループ討議・発表

ワークシヨップ③ 総括

主任講師 山口大学教育学部教授 霜川 正幸 氏

日本の田舎は宝の山

―農村資源を活かすのは、都市と農村をつなぐ起業家の育成―

NPO法人えがおつなげて 代表理事 ● 曾根原 久司

地域活性化センターでは、地方創生の担い手となる人材の養成を目的としたワークショップ「地方創生実践塾」を実施している。11月25日(水)～27日(金)に山梨県北杜市で開催された実践塾の内容について、主任講師の曾根原久司氏にご報告いただいた。

(地域支援課)

活用されていない農村資源

私は、日本の田舎の資源は、宝だと思っている。この思いは、農村に暮らす人なら、誰にも通じる思いだと思う。この日本の田舎の宝の資源が上手に活用されたなら、10兆円ぐらいの国内産業が創出されるだろうと思っている。なぜなら、それぐらいの宝の資源の蓄積があるからだ。世界の先進国の中で、第2位の森林率を誇る森林資源。40万畝にもなる耕作放棄地。地球10周分に匹敵する農業用水路。四季折々の美しい農村の自然景観。農村地域の暮らしの中で育まれた豊かな食文化等々。みな、すばらしい宝の資源だ。ただ、残念ながら、これらの資源が有効に活

用されていない。しかし、もしもこれらの農村の資源に価値が与えられ、新しい商品となり有効に活用されたならば、私は、10兆円の地域産業が創出されると思っている。また、森林、農地、自然環境などを活かす10兆円規模の産業が創出されることで、100万人の雇用創出が可能だと考えている。

欠けている「起業家」の視点

私自身、そんな考え方のもと、耕作放棄地や未活用の間伐材などを活用して、さまざまな事業を開発してきた。耕作放棄地の棚田を再生し、復活した棚田で栽培した酒米で純米酒を造る。未活用の間伐材を使って住宅の建材などを作る。耕作放棄地

の再生からコメ作りといった一連の農作業を企業の社員研修として行う取り組みなどである。地方創生実践塾では、そのような活動の取り組みを、NPO法人えがおつなげてと連携して活動している三菱地所、マーケティングフォースジャパン(日清オイリオグループ)、金精軒から発表していただいた。

そんな活動の中で浮かんできた疑問は、農村には活用されていない有用な資源が多く存在するにもかかわらず、なぜ活用されないケースが増えてしまったのかという点だ。その背景はまず、農村の少子高齢化、担い手不足だろう。しかし、減少したとはいえ地域に担い手もいるはずだ。ではなぜ、その担い手が農村の資源を「活用する」担い手となりえなかったのか。

私は、「起業家」としての視点が、農村に欠如していたからだと考えている。活用されていない農村の資源を、「有用な資源」として捉え、新たな価値を加えて事業を創出できるような起業家としての視点だ。耕作放棄地や森林資源、空き家など活用されていないわが国の農村資源のばく大な量を考える時、起業家としての人材の創出が大いに期待される場所である。起業家の活躍によって、これらの農村資源が活用され、それによって新たな雇用機会につながるからである。

グループワークで ビジネスモデルづくりを体験

その農村起業家における大切なポイントが、都市と農村をつなぐという視点だ。農村にある耕作放棄地や森林資源、空き家などの資源に、都市のニーズをつなげて価値を創出するという視点である。都市には、食と農、自然体験、田舎暮らし、健康や癒しといった農村に向かうニーズがある。これらの都市のニーズと農村の資源をつなげてあげるのだ。これによって農村資源に新たな価値が生まれる。この両者のさまざまな組み合わせによって、さまざまなバリエーションの事業のアイデアが浮かんでくる。さらにこの事業のアイデアを、以下の5つのPの視点で、ビ



主任講師・曾根原氏による講義

ビジネスモデルという事業の形を作るのである。

プロダクツ Products: 製品・サービス

プライス Price: 価格

プレイス Place: 販路・流通

プロモーション Promotion: 販

促・PR

パーソン Person: 顧客、事業

体制

今回行われた地方創生実践塾では、この農村資源と都市のニーズをつなぐビジネスモデルづくりを、参加者のみなさんにグループワークを行っていただき、実際にビジネスモデルづくりを体験していただいた。参加者のみなさんには、この考え方の有効性についてきつと実感いただ



グループワーク 発表

けたと思う。

農村資源を活用すれば
10兆円の産業創出も

現在、わが国の農村では担い手の減少傾向が著しいが、私はその延長上で、今から10年後には、実質的な農業従事者はおそらく半減するだろうと推測している。一般的には減少するから大変だと思われるが、私はむしろチャンスと捉えている。

今後10年の間に、農業などの1次産業分野に新たなプレーヤーが次々に参入し、産業構造が大きく転換していくだろうと推測している。同様に、林業にも大きな可能性が秘められている。世界の先進国の中で、第2位の森林率を誇る森林資源を保有するか



NPO 法人えがおつなげて古民家事務所での集合写真

らだ。しかも、戦後植林してから60年ほど経過している木が多く、全国で伐採期を迎えている。さらに漁業も含めて、日本の1次産業には産業構造を転換し、新しい産業を生み出す余地が大きく残されている。私は以前より、日本の農村資源を活用すれば、10兆円の産業が創出できると主張してきた。農村資源を活用した10兆円産業の内訳は、下記の通りだ。

- ① 6次産業化 (3兆円)
- ② 農村での観光交流 (2兆円)
- ③ 森林資源の林業、建築、不動産等への活用 (2兆円)
- ④ 農村にある自然エネルギー活用

(2兆円)
⑤ 教育、健康、IT、福祉、メディア等のソフト産業と農村資源活用との連携 (1兆円)

この5分野が、わが国の農村の資源特性から考えて、有望な産業分野と考えている。私は、以前よりこのことを主張してきたが、いよいよ、政府の地方創生の政策においても、農林漁業を成長産業として捉え、「6次産業」を10兆円産業に設定する政策目標も閣議決定された。みなさん、日本各地の農村資源の宝を活かして、新たな地域産業を各地で創造していこうではありませんか。

地方創生実践塾 (山梨県北杜市) の概要

テーマ: 限界集落のおこしかた
～企業との連携による農山村地域活性化の手法を学ぶ～

第1日目 11月25日 (水)

プログラム① 研修概要説明・課題提起

主任講師 NPO 法人えがおつなげて代表理事 曾根原 久司 氏

プログラム② 「企業ファーム事例紹介」

特別講師

三菱地所株式会社 環境・CSR推進部副長 鈴木 康之 氏

株式会社マーケティングフォースジャパン

代表取締役社長 横山 秀樹 氏

金精軒製菓株式会社 代表取締役 小野 光一 氏

プログラム③ 一日のまとめ、翌日のプログラム説明

主任講師 曾根原 久司 氏

第2日目 11月26日 (木)

プログラム④ 講義

主任講師 曾根原 久司 氏

プログラム⑤ フィールドワーク

増富地区 企業ファーム視察

プログラム⑥ フィールドワーク

えがおつなげて古民家事務所

プログラム⑦ グループワーク

「都市と農村をつなぐプランニング」

第3日目 11月27日 (金)

プログラム⑧ 講義

主任講師 曾根原 久司 氏

プログラム⑨ グループワーク

発表準備

プログラム⑩ グループワーク

発表・総括

合宿による交流のまちづくり推進事業

— 地域資源を活かしたスポーツの振興を目指して —

名寄市企画課企画調整係主査

● 成毛 哲也

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。地域活性化センターでは、「移住・交流による地域活性化支援事業」として、地域団体もしくは市町村等が自主的・主体的に実施する、都市住民などを受け入れる事業を支援している。

今回、平成26年度に同事業を活用した北海道名寄市の取り組みを名寄市企画課企画調整係主査の成毛哲也氏にご紹介いただいた。

(企画・コンサルタント業務課)

名寄市の概要

名寄市は、北海道の北部に位置し、天塩川と名寄川に育まれた肥沃な大地により、もち米の作付面積が日本一であるほか、アスパラガスが北海道有数の作付面積・収穫量を誇るなど、農業を基幹産業とする人口約3万人のまちです。

夏冬の寒暖差は60℃に及び、夏にはひまわりが市内各所で咲き誇り、冬は雪質日本一の名寄ピヤシリスキー場、北海道立サンピラーパーク

内のカーリングホール、雪質日本一フェスティバルなど、雪と寒さの魅力を大いに活かしています。

さらに、日本最北の公立大学「名寄市立大学」は、保健・医療・福祉の専門知識を集約し地域に貢献できる人材を養成しているほか、なよろ市立天文台「きたすばる」には、北海道大学により国内最大級となる口径1.6mの望遠鏡が設置され、宇宙観測の前線基地となっているのももちろん、情報発信の役割も担っています。

スポーツ振興における課題

本市では、平成24年に、「名寄市観光振興計画」を策定し、官民一体のオール名寄による観光振興やまちのPRを行っています。観光資源については、農業や商工業、大学などの各分野と結びついた幅広い事業を盛り込みながら、経済界も含めた市内全体の活性化を図るための様々な取り組みを進めてきました。

冬季スポーツの振興については、FIS（国際スキー連盟）公認のスキークール、クロスカントリー、ジャンプ台、屋内カーリング場などの充実した冬季スポーツ施設を活用し、これまで毎年国内トップクラスの選手による合宿や全国規模の大会等を開催してきました。しかし、経済不況等を背景に、過去に6千人以上あった合宿利用者が、近年では3千人を割り込む状況となっているほか、合



なよろ市立天文台「きたすばる」

宿の受け入れ体制整備やジュニア選手育成などが課題となっています。また、夏季スポーツについても、陸上競技場やサマージャンプが可能なジャンプ台等の施設がありますが、合宿誘致の面では、現在のところ有効に活用できていない状況です。

スポーツ合宿による地域振興を

このように、本市では、スポーツ合宿や大会誘致に活用できる施設を有しながらも、その取り組みが十分に進んでいない一方で、全国的には、平成30年（2018年）の平昌オリンピックや平成32年（2020年）の東京オリンピックの開催により、スポーツツーリズムの普及が期待されているところです。

そこで、合宿受け入れのための庁

内検討委員会を立ち上げ、「合宿による交流のまちづくり推進事業」として、アドバイザーからの助言をいただきながら、地域全体における合宿の受け入れ体制を再構築し、地域資源を活かしたスポーツツーリズムの仕組みづくりや、合宿の誘致団体と市民との交流によるスポーツ指導、セミナーの開催など、スポーツ合宿の推進による交流人口の拡大や移住定住の取り組みを進めていくこととしました。

冬季施設の有効活用とジュニア育成

平成26年7月、スポーツツーリズムを促進するJSTA（一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構）事務局長の中山哲郎氏をアドバイザーに迎え、市内視察ののち、市、商工会議所、観光協会等との意見交



フォーラムの風景



合同合宿練習風景



ジャンプ大会の様子

換会を実施しました。

意見交換会では、冬季競技とジュニア層に重点を絞った取り組みが必要として、冬季競技については、冬季施設の有効活用を図る一方で、夏の長距離競技等への利用転換についても検討する余地があるとし、合宿については、ジュニア層から段階的に誘致の受け入れを図るほか、その受け入れ体制としては、ワンストップサービス化の取り組みや専用のホームページを開設する必要があるとの提言がありました。また、当市には魅力的な観光施設が多く、スポーツツーリズムの促進においては大いに期待されるとの意見もいただいています。

このように多くのアドバイスをいただくとともに、意見交換会を通じて、市内関係者の間における合宿誘致やスポーツツーリズムに関する意

思疎通も図られたことから、今後の合宿受け入れ体制の構築に向けて有意義なものとなっています。

様々な合宿受け入れの取り組み

中山氏からのアドバイスを受け、冬季スポーツにターゲットを絞った合宿受け入れの取り組みを行っています。

カーリングでは、韓国女子ジュニアショナルチームの誘致に成功したほか、道内外のジュニアチームによる合同合宿を行い、あわせて市民参加によるフォーラムも開催しました。フォーラムでは、講師にジュニアの世界的指導者であるJ・D・リンド氏と、日本スポーツ振興センターの阿部篤志氏を迎え、指導者等150人の参加のもと、国際舞台で活躍するトップ選手の育成のほか、名寄の優位性を活かしたスポーツ振

興や合宿誘致策についての意見が交わされました。

さらに、「世界女子カーリング選手権札幌大会」や「2017冬季アジア札幌大会」等における大会直前の合宿誘致として、大会事務局や世界カーリング連盟に対して当市のPRを行ったところ、ロ

シア女子ナショナルチームの合宿誘致に成功しています。

スキー関連では、東海大第四高校スキー部を誘致し、あわせて参加者にアンケートを実施することで、合宿受け入れの情報収集を行うとともに、当市の改善点が把握できたほか、開催が決定している「全日本中学生選抜スキー大会」や「JOCジュニアオリンピックカップ」の開催地へ視察を行い、大会運営方法や合宿受入状況等についての調査を行いました。

スポーツツーリズムの仕組みづくりも

合宿誘致に成功したロシアチームは、世界大会で見事3位に入賞し、ロシアカーリング協会より感謝状をいただくなど、その結びつきが強まったことから、今後の取り組みにおいて十分に活かしていかなければならないと思っています。

このように、本事業の取り組みでいただいた多くのアドバイスや人のつながりに感謝するとともに、今後さらにこの成果を活かすべく、オール名寄による合宿受け入れ体制の強化や誘致PRの促進、ホスピタリティ等の質の向上を図るほか、市民とのつながりを重視した取り組みを行いながら、スポーツツーリズムの仕組みづくりのほか、交流人口の拡大や移住定住の確保を図っていきたいと考えています。

牡蠣殻を使った河川の水質浄化大作戦

子どもたちの未来に向けた環境保全活動―

熊本県八代市は、県内第2の人口を擁する田園工業都市であり、日本三大急流の一つである県内最大の河川、球磨川水系が市内を流れている。

また、九州新幹線や県内最大の国際物流拠点である八代港を有するなど、交通の要所としての都市機能も有している。

今回は、同市内で約15年間にわたって精力的に活動を行っている環境ボランティア団体「次世代のため

にがんばる会（以下、「がんばる会」）の松浦ゆかり代表にお話を伺った。

住民と共に河川環境保全

平成13年、がんばる会は八代市環境基本計画の策定委員の有志によって発足した。当時、行政が策定する計画に「市民の意思反映を」と話し合いの場が持たれたものだったが、松浦代表は「机上論だけでは環境問題を人々に伝えるのは難しい。何か行動に移さなければ」という思いが強かったという。そこでがんばる会が始めた取り組みが「牡蠣殻を使った水質浄化」であった。

きっかけは、発足当時から同会に関わっている北九州市立大学教授・森田洋氏（当時は八代工業高等専門学校在籍、現在は同会の顧問）の「日本の各地で行政が牡蠣殻を使った浄化活動をしている事例があるから、これを市民団体でやってみては

どうか」という助言からだったそう

だ。そうして始めた「河川の水質浄化大作戦」は、当初30人ほどの有志で活動していたが、大量の牡蠣殻を運ぶ作業に力を貸そうと、市内の高校生数百人が集まる大規模な活動となり、例年地域住民が多数参加して開催される一大行事「かき殻まつり」となった。この活動が県内外に話題を呼んだことで、県や国の省庁からも徐々に注目されるようになり、また活動に協力してくれる人々のネットワークが広がるなど、その後の様々な活動に繋がっていった。

活動が続けているうちに

がんばる会の活動を新聞記事で見た県の氷川ダム管理事務所長から「氷川ダム湖でも水質浄化を実施してほしい」と依頼されたことが契機

となり、八代高専（現・熊本高専八代キャンパス）の実験協力によって、木炭やナノバブルと比較して牡蠣殻の濁水改善効果が最も高いことの実証を得ることができた。その後、改めて県から依頼を受けて氷川ダム湖でも水質浄化を行っているほか、環境学習会「氷川ダム流域ディキャンプ」を実施して参加者から大きな反響を得るなど、取り組みは発展してきている。

ごみを捨てない人づくり

牡蠣殻による水質浄化活動を行っているうちに、松浦代表は河川沿いに落ちているごみの多さに注目する

★団体プロフィール★

設立年＝平成13年
設立・運営主体＝任意団体
代表者＝松浦 ゆかり
構成員＝20名
〈連絡先〉
〒866-0856
熊本県八代市通町 6-43
電話：0965-32-5081



かき殻まつり

ようになった。そこで、地域の小学校で環境に関する出前授業を行い、その後、実際に河や海に出て子どもたちにごみの調査をしてもらう環境学習活動を始めた。「八代海河川・浜辺の大掃除大会」と称したこの企画には市も賛同し、職員が子どもたちにごみの分別方法を教えるなど官民共同の共催企画となっており、毎年9月に定期的に開催され、平成16年から現在まで続いている。

また、子どもたちが河川沿いのごみを調査し、「大人の捨てたごみ」と「子どもの捨てたごみ」に分けてごみ拾いを行う「子どもごみパトロール隊」は、国土交通省や県保健



八代海河川・浜辺の大掃除大会

所と共同して7年間継続している。「大人はこんなにごみを捨てている」という参加した子どもたちの声が地域に拡がっていくことで、子どもたちへの環境教育だけでなく、大人に「ごみを捨てない意識」を強く持たせることにも繋がっているという。

ごみを出さずに資源活用

八代市では、焼却施設の老朽化による処理能力低下が問題となり、市内から出るごみの一部を市外の焼却施設へ委託することになったため、平成22年7月1日に「ごみ非常事態」が宣言された。これを受けたがんばる会は、出来るだけごみを出さない



子どもごみパトロール隊

よう資源再利用の啓発に努め、その一つとして「リユース食器の無料貸し出し」を行っている。これは廃棄予定だった学校給食用の食器を譲り受け、同会のイベントで使用するか、地域のバザーなどの催しの際に無料で貸し出しを行うというものだ。紙皿や割り箸などを使わずに済むため、ごみの減量、ひいては焼却によって排出されるCO₂の削減にも貢献している。

そのほかにも、平成25年頃から「もったいなか箱」と名付けた生ごみの堆肥化箱を普及させる取り組みも行っており、現在市内の一般家庭などに150件近く設置している。

また、市内の保育園などでも生ごみ処理に関する学習会を開催したり、「もったいなか講演会」を開催して市内外からの参加者に生ごみのリサイクル方法やその堆肥から作られる有機農業の実演を行うなど、市民の生ごみに対する意識改革に力を注いでいる。

自然環境の尊さを子どもたちに伝えていく

平成13年のがんばる会発足以後、その活動はメディアなどを通じて着実に広まり、平

成20年には環境省主催「環境大臣賞」を受賞。平成26年には国土交通省九州地方事務所長から「河川法第58条の8第1項の規定による河川協力団体」の指定を受け、翌27年には「熊本県ユネスコ協会会員」に登録されるなど、数々の賞を受賞し、その功績が讃えられている。

松浦代表は、大人と子どもの世代間交流や、山間部から沿岸部までの地域間交流の視点を常に大切に行っているという。「Think globally, Act Locally」（考えは地球規模で、まず身近なところから行動せよ）という活動趣旨のもと、自然環境や命の尊さを「次世代を担う子どもたち」に伝えていくこと、そのために官・民・学・産が互いに手を取り合って住民が主役になれる仕組みを構築し、環境へ配慮する意識を持った人々の輪を広げていくことががんばる会の理念だ。

「地域で体験したことを親から子へ伝えていくことが大事なんです。教科書はいりません。参加した子どもたちが五感で感じたことが身になってくれたらと思います」と語る松浦代表。これからの世代を担う子どもたちの未来がますます明るくなることを願いたい。

年間売り上げ1億円以上、過去最高の29店

—自治体アンテナショップ実態調査—

地域活性化センターは、地域情報の発信や特産品販売を行っている「自治体アンテナショップ（東京都内）」の実態調査（平成27年4月1日現在）結果をまとめた。

プレミアム商品券取り扱い扱いは20店

店舗数は、平成26年4月より3店多い55店となった。今後も、新たに富山県、長崎県など複数の自治体の出店の動きがある。売上は、年間1億円以上のショップが29店となり過去最高だった。

今回、初めて、アンテナショップにおける地方創生関連の「プレミアム商品券」「移住」等についての調査を行った。それによると、プレミアム商品券の販売は20店（全体の36・6%）となった（表1）。移住では、パンフレット・書籍などを設置しているショップが最も多く29店（全体52・7%）で、続いてイベント開催、相談員常駐となっている（表2）。

表1 地方創生関連（重複回答）

地方創生関連の取り組み	店 数
プレミアム商品券の販売	20
プレミアム旅行券の販売	8
プレミアム商品券等の販売計画はない	20
その他	6

表2 移住関連（重複回答）

移住への取り組み	店 数
パンフレット・書籍の設置	29
相談員の常駐	4
交流会・イベント等の実施	8
検索システムの設置	1
その他	3

表3 外国人訪問者への接遇（重複回答）

外国人への接遇	H27年度 (55店)	H26年度 (52店)	H25年度 (54店)
外国語の案内パンフレット	18	2	2
ホームページの多言語化	7	5	4
レストランメニューの多言語対応	6	3	2
語学ができるスタッフ常駐	9	6	8
フリーWi-Fiが整備されている	10	-	-
免税店である	3	-	-
その他	5	-	-

※各年度の下 の（ ）内は調査対象店舗数

外国語パンフレット設置が大幅増
外国人訪問者への対応については、ショップに外国語パンフレット設置が前回（平成26年4月）の2店から18店と、大幅に増加した。（表3）

その主な要因として、平成27年1月に地域活性化センターと各アンテナショップが共同で作成した英文パンフレットがあるとみられる。そのほか、語学スタッフの常駐や、ホームページ、レストランメニューの多言語対応などがあげられた。

国人の増加が期待され、東京だけではなく地方へも足を運んでもらうための拠点としてアンテナショップの活用が期待される。
なお、今回の調査結果の詳細は、当センターのホームページで公開している。

広報室 ● 畠田千鶴



発信します！笑顔と力で地方創生 —「幸せます」のまち防府の取り組み—

防府市長 ● 松浦正人

防府市は、1300年の昔、周防の国の国府（国衙）が置かれ、この地方の政治・経済・文化の中心地として栄えてまいりました。また、日本三天神のひとつで日本最初の天満宮である防府天満宮の門前町として、更には、毛利藩の米・紙・塩の生産を奨励した殖産政策、いわゆる「毛利の三白政策」の中心的地域として発展の一途をたどり、一級河川・佐波川の豊かな恵みのもたらす県内最大の平野と、近年は自動車産業を中心とする工業集積地として順調な発展を続けております。「防府」の地名は、周防の国の国府に由来しております。昨年放映のNHK大河ドラマ「花燃ゆ」の主人公、榊原素彦男爵ご夫妻が晩年の30年を過ごされ眠っておられる地でもあり、維新の志士達が闊歩し、幕末激動の長州を支えた地として、歴史に大きな足跡を残すなど、古代から近代に至る貴重な歴史的資産が重層的に点在しております。

人口約12万人の本市は、本年8月に市制施行80周年の大節を迎えます。私は平成10年の市長就任以降、平成13年より市民のご理解とご協力のもと平成の大改革とも言える行政改革を断行してまいりました。その効果額は、平成26年時点で154億円を超え、市財政は強固なものとなり、今では、「行政改革→健全財政→市民生活向上」という好循環の中で、防災・市民生活環境整備、子育て・高齢者対策、教育・文化・スポーツ施設の充実、観光・活性化対策への様々な取り組みを進めながら、山口県下において小粒ながらもピカリと輝く都市となることができました。

私は市長職5期目を働かせていただいておりますが、全国813市から構成される全国市長会の、まちひと・しごと創生対策特別委員会委員長や教育再生首長会議会長の大役をいただき、安倍総理の内政面の重要課題を地方の立場で推進、お手伝いさせていただくとともに、3

年続けて全国市長会政策推進委員会委員として基礎自治体から政府への意見具申等もさせていただいております。

今後のまちづくりにおいて、私は、動かざるものを中心にしてまちを創っていくべきと考え、1100年鎮座いただく防府天満宮、110年交通の拠点としての防府駅、そして重要港湾三田尻・中関港、この三つの動かざるものを中心軸にしてコンパクトなまちを築いていくことが大切と考えております。また、「地域の学校を廃校にしない」「教育こそ全ての源」の考えのもとに、市内全域で展開しておりますコミュニティ・スクールの更なる充実などにより、学校が地域の人と人をつなぎ、まちづくりの原動力となるよう地域とともにある学校づくりを進めてまいりたいと考えております。

一方、山口県の方言で「幸せます」（幸いです、うれしく思います、助かります、ありがたいです、便利ですの意）という言葉がございますが、県立防府商工高校の生徒さん達の発案により、防府市の地域ブランドとして「幸せます」を商標登録し、地域発の商品開発や地域イベント等で「幸せます」商標の活用を進めております。数年前よりイベントの表題やお土産商品の名前などに使用しており、本市のイメージを表現できる大切な言葉として、また、この言葉を原動力として「幸せます」防府市の浸透と、地域ブランドとしての強化を図ってまいりたいと考えております。

恵まれた地力を活かし、20年後の市制100周年を見据えて、千年の豊かな歴史に支えられた防府の魅力を発信し、「地方創生は防府から！」の決意のもと、「学ぶなら防府、働くなら防府、住むなら防府」と真に思っている防府市にしていきたいため、これからも全力を尽くして働いてまいります。

山形で待っています

お米はここまで美味しくなれる。
つや姫

山形県知事
吉村 美栄子

すまいる山形暮らし案内所（山形県庁内）
TEL 023-630-3083 FAX 023-630-2130

やまがたハッピーライフ情報センター（東京交通会館内）
TEL 03-6269-9533 FAX 03-6269-9534

総合相談窓口

移住に関することなら
なんでもご相談ください！

<http://www.pref.yamagata.jp/ylife/> (PC) すまいりい君

甲賀市は滋賀県の南端にあり、三重県・京都府と隣接しています。かつて東海道の難所と言われた県境の鈴鹿山脈は豊富な森林資源を有しており、近畿の水がめ琵琶湖の水源として重要な役割を担っています。

481.62平方^{キロ}の広大な面積の市内には二つの旧東海道宿場町や陶芸の街・信楽があり、多様な文化が育まれてきました。

特に「忍者」を究極のクールジャパンコンテンツとして、隣接する三重県伊賀市や日本忍者協議会と連携しつつシティプロモーションの核と位置づけ、まちづくりを進めています。忍者の日の前日となる2月21日には、市を挙げたイベントを開催し甲賀流忍者復活の狼煙をあげます。

当市には、全国で唯一現存する本物の忍術屋敷や本格的な忍者体験のできる忍術村があるだけでなく、本物の忍者が生活し、術を磨いた記憶が市内の至る所に静かに残っています。全国唯一の甲賀流忍者を感じることができるまち・甲賀に是非お越しください。



忍者のまち・甲賀

■当市は甲賀流忍者発祥の地



■忍術体験ができる「甲賀の里 忍術村」



■狸が迎える信楽



■「土山」「朝宮」は茶処として有名



■七夕に行われる手筒花火奉納。忍者は火薬精製にも長けていた
■市内マスコットキャラクター達。「ぼんぼこちゃん・にんじゃえもん・チャチャ」(写真左から)



■宿場町の面影が残る東海道



■本物の忍術屋敷が資料館に「甲賀流忍術屋敷」



■市特産品等を集めた「甲賀ブランド」

平成 27 年度 地方成功人材のマッチングによる 土日集中セミナーのお知らせ

「木からつながるひとと地域 ～木育の推進と地域活性化～」

木は日本の国土の7割を占める身近な資源ですが、木材自給率は3割程度しかなく、有効活用できていません。一方で、木が持つあたたかみには、心にやすらぎをあたえコミュニケーションを活性化させることで、人と人の豊かなつながりを生み出す効果があり、子育てや福祉分野への活用が期待されます。また、木を活かす木育の取り組みは、地域資源としての木を見つめ直すことにもつながり、木に関わる地域産業の活性化や里山が整備されるという効果も生まれています。

このセミナーで、木育を通じた地域の活性化について実践者とともに考えを深めましょう！

【開催日程】平成 28 年 2 月 20 日（土）13:00～18:10、21 日（日）9:00～12:30（予定）

【会場】東京おもちゃ美術館（新宿区四谷 4-20 四谷ひろば内）

【講師】ただちひろ 多田 千尋氏（認定 NPO 法人日本グッド・トイ委員会理事長、東京おもちゃ美術館館長）

ばきよし 馬場 清氏（認定 NPO 法人日本グッド・トイ委員会事務局長）

みずたにしんきち 水谷 伸吉氏（一般社団法人モア・トゥリーズ事務局長）

わかすぎこういち 若杉 浩一氏（パワープレイス株式会社シニアディレクター

リレーションデザインセンター特命部長）

まえしまかほ 前島 香保氏（秩父市環境部森づくり課主査）

あおきりょうすけ 青木 亮輔氏（株式会社東京チェンソーズ代表取締役）

【対象】地域活性化に熱意のある方、地域のことを勉強したい方など 50 名

【参加費】一般 25,000 円、大学生 10,000 円

※ 3 回券（60,000 円）、6 回券（90,000 円）あり〔複数人での使用も可〕

※ 今年度の土日集中セミナーはこの回で終了です。回数券使用のラストチャンスです。

【申込方法】FAX(03-5202-0755)、E-mail (creative@jcrd.jp) または、ホームページの申込フォーム

【問合せ先】クリエイティブ事業室 (TEL :03-5202-6134)

※ 詳しくはホームページをご覧ください。http://www.jcrd.jp/



木のおもちゃと触れ合う親子

地方創生フォーラム in 東京 開催のお知らせ (第 20 回ふるさとイベント大賞表彰式 同時開催)

2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向け、全国各地で外国人観光客の誘客などを狙った取り組みが進められていますが、東京における開催は、地方にあまり恩恵をもたらさないのではと危惧する声も聞かれます。2020 年を 4 年後に控えた今、地方創生の実現のために私たちはどういった発想や視点を持ち行動していくべきなのか。基調講演とパネルディスカッションで考えます。

【日時】平成 28 年 3 月 2 日（水）13:00～17:15

【会場】東京国際フォーラム B-5 ホール（東京都千代田区丸の内 3-5-1）

【対象】地方創生に関心のある方 400 名（参加無料、先着順）

【プログラム】

○第 20 回ふるさとイベント大賞表彰式

○基調講演：「2020 年東京オリンピック・パラリンピックと地域活性化」

講演者：室伏 広治氏（東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 スポーツディレクター）

○パネルディスカッション「2020 年東京オリンピック・パラリンピックを見据えたスポーツによる地方創生」

コーディネーター：青島 健太氏（スポーツライター&キャスター）

パネリスト：室伏 広治氏

丸田 藤子氏（ながの街中賑わい研究所 代表）

三崎 富査雄氏（株式会社野村総合研究所 コンサルティング事業本部 パートナー）

ほか 1 名（調整中）

※基調講演及びパネルディスカッションの登壇者は予告なく変

更となる場合があります

【問合せ先】地域支援課

(E-mail chiiki@jcrd.jp TEL 03-5202-6136)

※ 申込み方法等、詳しくはホームページをご覧ください

(地方創生フォーラム 東京 で検索)



室伏 広治氏



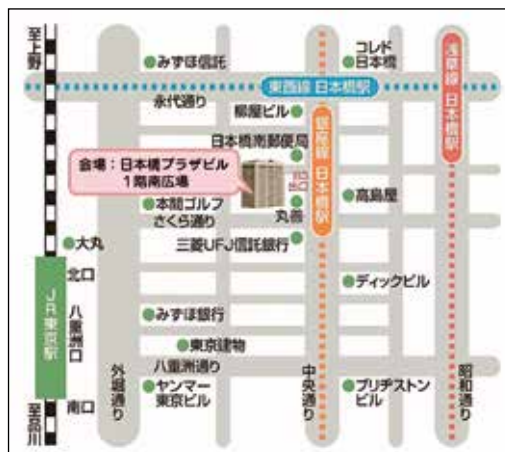
青島 健太氏

—日本橋イベントスペースのご案内—

日本橋イベントスペースとは・・・

一般財団法人地域活性化センターでは、全国各地で行われている特産品開発や観光おこしの活動が促進されるよう、地方公共団体等の皆様へ、各地域の産品や観光PR等を目的としたイベントを実施するためのイベントスペース（会場：東京都中央区日本橋2-3-4、日本橋プラザビル1階南広場【屋外】）を提供しております。

イベント実施場所



東京駅八重洲北口より徒歩4分、
地下鉄銀座線日本橋駅 B3 出口より徒歩2分

行きたかったあの町が、日本橋にやってくる！

平成27年度も、北は北海道、南は鹿児島まで、全国津々浦々、たくさんの地域から出店いただいています！地域の物産品の試食販売や、多彩なゆるキャラによる観光PRなど、地域の特色を活かした出展が目白押しです！

興味を持っていながらも、なかなか訪れる機会のなかった地域の物産品・観光情報を手に入れる絶好のチャンスです！

お気に入りの地域はもちろん、これまで知らなかった地域との素晴らしい出会いもあるかもしれません。年間スケジュールをご確認の上、ぜひ日本橋イベントスペースに足をお運びください！

出店の様子



日本橋イベントスペースであなたのまちをPRしませんか？

平成27年度に引き続き、平成28年度も日本橋イベントスペースの提供を予定しております。地域の特産品や観光情報などを首都圏でPRする絶好のチャンスですので、ぜひご応募をご検討ください！応募の詳細は、当センターHP（<http://www.jcrd.jp/>）でご確認ください。



一般
財団
法人

地域活性化センター

〒103-0027 東京都中央区日本橋2-3-4
日本橋プラザビル13階
担当：地域づくり情報課
TEL 03-5202-6138 FAX 03-5202-0755

地域づくり2月号

2016年2月1日発行 編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話 03-5202-6131（代）<http://www.jcrd.jp/> 印刷・製本／株式会社太平印刷社

法律で許可された場合以外に本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課（03-5202-6138）まで、ご連絡下さい。



宝くじは、 みなさまの 豊かな暮らしに 役立っています。

宝くじは、図書館や動物園、学校や公園の
整備をはじめ、少子高齢化対策や災害に
強い街づくりまで、さまざまな
かたちで、みなさまの
暮らしに役立っています。

一般財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。



一般財団法人

日本宝くじ協会

ホームページ

<http://jla-takarakuji.or.jp/>



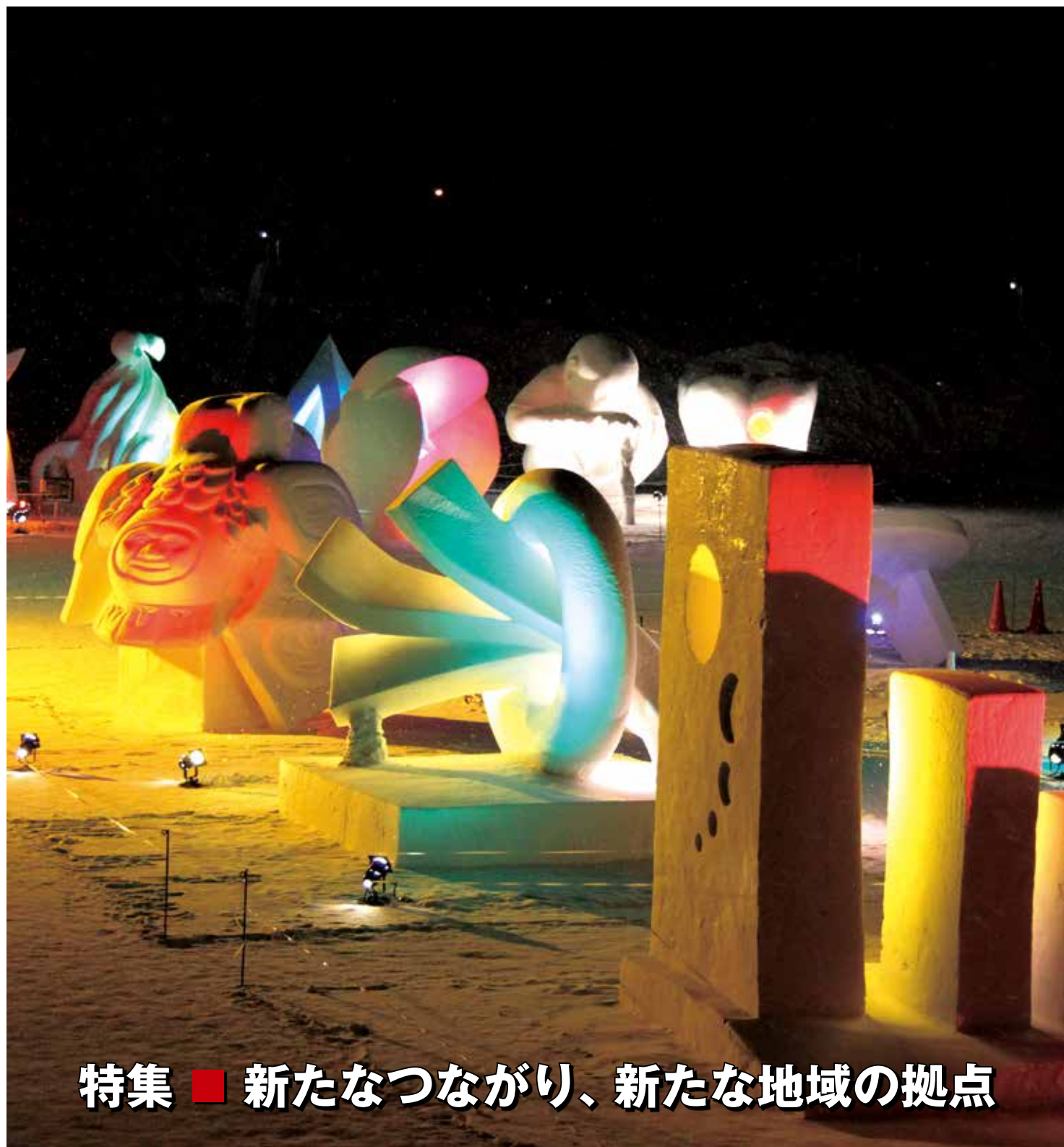
明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2016

2

ISSN 1340-8917



特集 ■ 新たなつながり、新たな地域の拠点

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです

